第45回
関東甲信地区中学校英語教育研究協議会
茨城大会要項

茨城県庁

令和 3年 11 月 12 日

関東甲信地区中学校英語教育研究協議会

茨城県教育研究会英語教育研究部

目　次

1　あいさつ　　第 45 回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会会長　　森　久美子・・・・・２
2　祝　　辞　　水戸市教育委員会教育長　　志田　晴美様・・・・・３
3　大会開催要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
4　大会主題提案・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
5　記念講演　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
6　分科会　　第１分科会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
茨城県水戸市立緑岡小学校・水戸市立緑岡中学校・・・・・・・・・・・・・・・１５
千葉県流山市立南流山中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
埼玉県所沢市立安松中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
茨城県つくば市立みどりの学園義務教育学校・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
第２・３分科会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
茨城県水戸市立常磐小学校・水戸市立第一中学校・・・・・・・・・・・・・・・２３
群馬県みどり市立笠懸南中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
栃木県真岡市立真岡中学校・芳賀町立芳賀中学校・・・・・・・・・・・・・・・２７
茨城県笠間市立岩間中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
茨城県常陸太田市立金砂郷中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２
第４分科会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
茨城県水戸市立第四中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
長野県高山村立高山中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７
山梨県市川三郷町立三珠中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
山梨県昭和町立押原中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
茨城県常総市立水海道中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
第５分科会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７
茨城県水戸市立赤塚中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８
神奈川県川崎市立井田中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
東京都葛飾区立立石中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５２
茨城県神栖市立神栖第一中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４
7　茨城大会役員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
8　関東甲信地区中学校英語教育研究協議会会則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７
9　協賛団体・企業一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９

予測困難な社会の中における未来への人づくり

第４５回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会

茨城大会　会長　森　久美子

（茨城県教育研究会英語教育研究部　部長）

予測困難な時代となりました。令和元年１１月１５日実施された第４３回東京大会後、日本国内でコロナウィルスが発見され感染が広まり出したこと、東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会が１年見送られたことは予測ができなかったことです。平成２９年に告示された中学校学習指導要領の改訂の経緯に「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが成人して社会で活躍するころには、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。」というリード文が書かれており、その理由として生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測困難な時代となっていると続いています。しかし、今の子供たちが成人を迎える何年も前に新型コロナウィルス感染症の出現によって、未来社会の担い手となる人づくりの難しさや厳しい時代への挑戦に直面していることを実感しています。

この茨城大会前年の第４４回山梨大会が新型コロナウィルス感染拡大により、中止を余儀なくされました。本県は山梨県の皆様の思いを受け、大会役員と共にコロナ禍であっても安全にかつ安心して大会が開けるようにとオンライン開催という運営に切り替えまして、研究や運営を進めてまいりました。本大会は、これまでの英語教育の実践並びに英語教育の現状を見直し、英語教師自らの資質向上と授業改善・充実を図り、関東甲信地区英語教育に寄与するという趣旨に基づき「グローバル社会を生き抜くために必要なコミュニケーション能力の育成～伝え合う力を育むための段階的な指導等の工夫を通して～」という研究主題を設定いたしました。

子供たちが生き抜いていくグローバル社会には、外国語を話せるだけではなく、コミュニケーションを通して、互いの多様性を認め、自分の思いや考えを伝え合い、協働して問題を解決したり、新たな価値を創出したりする資質・能力を育むことが必要であると考えます。そのコミュニケーション能力を育成するためには、「やり取り」や「即興性」を意識し、「伝え合う力」を育むための言語活動と取組の工夫が不可欠であります。この点において、本県では、これまで県の事業としまして平成１１年度からの２１年間にわたりインタラクティブフォーラムを開催し「やり取り」や「即興性」に重点を置いた言語活動に関する実践を進めてきました。その実践から「伝え合う力」を育むためには、子供たちの発達段階に応じた、系統的かつ継続的な指導が重要と捉え、今年度よりプレゼンテーションフォーラムの開催へと舵を切ったところです。また、学校段階間の接続を、より円滑に進めるためには、小・中学校における一貫した学習到達目標の設定とともに、段階的な指導及び評価を指導改善に活かす工夫が必要だと考えています。以上のことを踏まえ、「伝え合う力を育むための段階的な指導等の工夫を通して」を本研究における副題にし、分科会テーマを定めて研究を進めてまいりました。

本大会で６本の授業動画を公開する県都水戸市は、平成２８年４月より小中一貫校としての教育を推進してまいりました。公開は小学校２校（施設隣接型及び施設分離型）と中学校４校です。小学校２校はそれぞれの校区の中学校と連携した授業の公開となっております。

結びに、本大会を開催するにあたり、ご指導・ご支援いただきました多くの皆様方に心より感謝申し上げますとともに、この度のオンライン開催による研究協議会が、英語教育に携わる皆様方にとりまして、明日からの授業改善とコミュニケーションを図る資質・能力を備えた人づくりの手助けとなりますことに期待しましてご挨拶とさせていただきます。

なにより、コロナと共に歩んでいく中で、子供たちがのびのびと笑顔で学ぶ学校の未来を願いつつ。

祝　辞

水戸市教育委員会教育長

志田　晴美

この度、第４５回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会茨城大会が、多くの方々のご協力により開催されますことを、心からお祝い申し上げます。本来であれば、関東甲信地区各地から多くの方々を、ここ茨城県水戸市にお迎えし、開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑みまして、オンラインでの開催へと変更になりました。そのような状況にありながらも、多くの先生方の研究成果を動画配信やオンライン協議会等で共有できますことを、誠に嬉しく思います。また、参加者の皆様や、研究会関係者の方々には、中学校外国語教育の充実・発展のためにご尽力をいただいておりますことに感謝申し上げますとともに、深く敬意を表します。

さて、中学校では今年度から、平成２９年告示の学習指導要領が全面実施となり、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が進められております。また、ＧＩＧＡスクール構想による一人一台端末環境での学びの実現により、学びのスタイルが、教師主導による一斉指導から「個別最適化された学び」と「協働的・探究的な学び」のベストミックスへと、劇的に転換されているところであります。

本市ではこうした動向を踏まえながら、近世の教育遺産群として日本遺産に認定された弘道館の「魁の精神を受け継ぐ文教の府」にふさわしい、水戸ならではの魅力ある教育を推進しております。その中の一つが、「一人一人の確かな学びと夢を実現する水戸スタイルの教育」です。水戸スタイルの教育とは確かな学びと学習意欲を高める教育「チャレンジプラン」、世界で活躍できる資質を磨く教育「グローバルプラン」、郷土を愛し、豊かな感性を磨く教育「キャリアプラン」、いのちや人権を大切にする教育「ふれあいプラン」の４つのプランからなる教育であります。「グローバルプラン」の一つとして「英会話力の向上」を推進しており、平成１６年度に「水戸市幼・小・中英会話教育特区」の指定を受けて以来、「英会話」を小学校及び中学校の一貫教科と位置付けて、特色ある教育課程を編成し、実施しております。また、義務教育９年間の学びの系統性を踏まえ、中学校区ごとに一貫した学習到達目標を設定するなど、小中連携を図った継続的な指導を進めております。

このように、外国語教育では、各学校段階の学びの接続を図ることが重要とされる現在、本研究協議会が「グローバル社会を生き抜くために必要なコミュニケーション能力の育成～伝え合う力を育むための段階的な指導等の工夫を通して～」を主題とし、５つの分科会による公開授業、提案等により開催されますことは、本市のみならず、全国の教育の場におきましても、大いに寄与するものであると考えております。

結びに、本大会の開催にあたり、ご尽力くださいました関係各位に感謝を申し上げるとともに、関東甲信地区中学校英語教育研究協議会の今後のますますのご発展、そしてご参会の皆様の一層のご活躍を祈念しまして、祝辞といたします。

第４５回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会
茨城大会開催要項

１　趣　旨

これまでの英語教育の実践並びに英語教育の現状を見直し、英語教師自らの資質向上と授業改善・充実を図り、関東甲信地区英語教育に寄与しようというものである。

２　主　題

グローバル社会を生き抜くために必要なコミュニケーション能力の育成

～伝え合う力を育むための段階的な指導等の工夫を通して～

３　主　催

関東甲信地区中学校英語教育研究協議会　　茨城県教育研究会英語教育研究部

４　共　催

群馬県小中学校教育研究会中学校英語部会
栃木県中学校教育研究会英語部会
千葉県教育研究会外国語教育部会
神奈川県公立中学校教育研究会英語科部会
長野県英語教育研究会
埼玉県英語教育研究会
東京都中学校英語教育研究会
山梨県中学校英語教育研究会

５　後　援

文部科学省　群馬県教育委員会　栃木県教育委員会　千葉県教育委員会
神奈川県教育委員会　長野県教育委員会　埼玉県教育委員会
東京都教育委員会　山梨県教育委員会　茨城県教育委員会　水戸市教育委員会
公益財団法人　日本教育公務員弘済会茨城支部

６　期　日　令和３年１１月１２日（金）

７　日　程　コロナ禍の状況を鑑み、 Zoom ウェビナーでの開催といたします。
※授業者への事前質問をもとに分科会を進行いたします。

9:10	9:45	10:00	10:20	11:10	12:00	13:00	13:50	14:40	16:00	16:10
受　付	開会 行事	基調 提案	公開授業 分科会① （第１分科会）	公開授業 分科会②③ （第２、３分科会）	昼食	公開授業 分科会④ （第４分科会）	公開授業 分科会⑤ （第５分科会）	記念講演 指導助言		閉会 行事

※太枠内は、大会終了後、 動画配信され、視聴可能となります。
期間は令和３年 11 月 15 日（月）～ 令和３年 11 月 30 日（火）といたします。

○　記念講演　「新学習指導要領における指導と評価」
講　師：　文部科学省　初等中等教育局　情報教育・外国語教育課 外国語教育推進室
教科調査官　山田　誠志　氏

○　公開授業（動画による提案 YouTube によるストリーミング配信）

第１分科会
授　業　者　水戸市立緑岡小学校　教　諭　杉嵜　祐斗
水戸市立緑岡中学校　教　諭　川俣　梨恵
助言指導者　ひたちなか市教育委員会　指導主事　阿部　倫子

第２分科会
授　業　者　水戸市立常磐小学校　教　諭　柏原　麻奈
助言指導者　水戸市総合教育研究所　指導主事　菅谷　智佳子

第３分科会
授　業　者　水戸市立第一中学校　教　諭　久保田　奈緒
助言指導者　水戸市総合教育研究所　指導主事　菅谷　智佳子

第４分科会
授　業　者　水戸市立第四中学校　教　諭　蓮見　宏明
助言指導者　笠間市教育委員会　指導主事　遠藤　正英

第５分科会
授　業　者　水戸市立赤塚中学校　教　諭　綿引　昌子
助言指導者　那珂市教育委員会　指導主事　久保田　善徳

８　主題設定の理由

近年のグローバル化の急激な進展等により、世界の経済や社会はめまぐるしく変化している。日本国内においても、多文化共生の広がりとともに、外国語による異文化間コミュニケーションの必要性が強調されている。そのような中、2019 年度に、新しい在留資格が導入されたことになどにより、今後さらに多くの外国人を受け入れていくことが予想される。「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」（文部科学省 平成 26 年 10 月）によれば、2050 年頃の日本は、多文化・多言語・多民族の人たちが共存し、協調と競争する国際的な環境にあると考えられている。

このようなグローバル社会を、子供たちが生き抜いていくためには、外国語を話せるだけではなく、コミュニケーションを通して、互いの多様性を認め、自分の思いや考えを伝え合い、協働して問題を解決したり、新たな価値を創出したりする資質・能力を育むことが必要である。

そこで、本県英語研究部では、「グローバル社会を生き抜くために必要なコミュニケーション能力の育成」を本研究における主題として設定した。本主題で掲げたコミュニケーション能力を育成するためには、「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編」が示すように「やり取り」や「即興性」を意識し、「伝え合う力」を育むための言語活動とその工夫が不可欠である。この点において、本県では、これまで、「やり取り」や「即興性」に重点を置いた言語活動に関する実践を進めてきた。その実践から、「伝え合う力」を育むためには、子供たちの発達段階に応じた、系統的かつ継続的な指導が重要と捉えている。また、学校段階間の接続を、より円滑に進めるためには、小・中学校における一貫した学習到達目標の設定とともに、段階的な指導及び評価を指導改善に活かす工夫が必要だと考えている。以上のことを踏まえ、「伝え合う力を育むための段階的な指導等の工夫を通して」を本研究における副題として設定した。

９　分科会テーマ・提案都県（動画による提案　YouTube によるストリーミング配信）

第１分科会　小中連携の実践的な取組　（千葉県・埼玉県）

提案者	流山市立南流山中学校	教諭　溝井　隆之
	所沢市立安松中学校	教諭　山井　葉里子
	つくば市立みどりの学園義務教育学校	教諭　吉田　圭介

【発表の概要】
小・中学校での外国語活動・外国語科の一貫した目標設定や、授業スタイルや教材の連携の在り方について提案するとともに、学年の発達段階に応じた系統的・継続的なコミュニケーション能力を育成するための段階的な指導の在り方について研究する。

第２・３分科会　話すこと（発表）の言語活動の工夫　（群馬県・栃木県）

提案者	みどり市立笠懸南中学校	教諭　渡辺　智哉
	真岡市立真岡中学校	教諭　塚田　邦彦
	芳賀町立芳賀中学校	教諭　篠崎　大輔
	笠間市立岩間中学校	教諭　田口　愛
	常陸太田市立金砂郷中学校	教諭　横山　聖

【発表の概要】
小学校では、学校や地域など、自分の身近なことについて、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを簡単な語句や基本的な表現を用いて、相手に分かりやすく話すための言語活動の工夫について研究する。
また、中学校では、日常的・社会的な話題について、簡単な語句や基本的な文を用いて、事実や考えなどを整理し、まとまりのある内容として発表するための言語活動の工夫について研究する。

第４分科会　即興で伝え合う力を育む指導の工夫　（長野県・山梨県）

提案者	高山村立高山中学校	教諭　片桐　園子
	市川三郷町立三珠中学校	教諭　小林　雄飛
	昭和町立押原中学校	教諭　清水　浩平
	常総市立水海道中学校	教諭　森　　恵

【発表の概要】
自分の思いや気持ちを即興で伝える力を養うために、コミュニケーションを行う目的や状況に応じた場面設定や、段階的・系統的な指導の工夫について研究する。

第５分科会　パフォーマンス評価を活かしたコミュニケーション活動の工夫　（神奈川県・東京都）

提案者	川崎市立井田中学校	教諭　井上　百代
	葛飾区立立石中学校	主幹教諭　河野　光志
	神栖市立神栖第一中学校	教諭　荒原　聡

【発表の概要】
実践的なコミュニケーション能力を育成するため、指導と評価を一体化した一貫性・整合性のあるパフォーマンス評価の在り方と工夫について研究する。

10　提案者、指導助言者一覧（動画による提案　YouTube によるストリーミング配信）

	提案者	指導助言者
第1分科会	流山市立南流山中学校 教諭　溝井　隆之 所沢市立安松中学校 教諭　山井　葉里子 つくば市立みどりの学園義務教育学校 教諭　吉田　圭介	千葉県教育庁東葛飾教育事務所 指導主事　南　弘三郎 所沢市立教育センター 指導主事　東村　広子 つくば市教育委員会 指導主事　福澤　誉子
第2・3分科会	みどり市立笠懸南中学校 教諭　渡辺　智哉 真岡市立真岡中学校 教諭　塚田　邦彦 芳賀町立芳賀中学校 教諭　篠崎　大輔 笠間市立岩間中学校 教諭　田口　愛 常陸太田市立金砂郷中学校 教諭　横山　聖	群馬県教育委員会事務局東部教育事務所 指導主事　半田　敦子 真岡市教育委員会 指導主事　村上　正行 茨城県水戸教育事務所 指導主事　山田　朋哉 茨城県県北教育事務所 指導主事　斎藤　崇
第4分科会	高山村立高山中学校 教諭　片桐　園子 市川三郷町立三珠中学校 教諭　小林　雄飛 昭和町立押原中学校 教諭　清水　浩平 常総市立水海道中学校 教諭　森　　恵	須坂市立墨坂中学校 教頭　櫻田　智也 都留市立禾生第二小学校 校長　立川　武 甲斐市立竜王北中学校 校長　依田　宏記 茨城県県西教育事務所 指導主事　木村　涼子
第5分科会	川崎市立井田中学校 教諭　井上　百代 葛飾区立立石中学校 主幹教諭　河野　光志 神栖市立神栖第一中学校 教諭　荒原　聡	川崎市総合教育センター　カリキュラムセンター 指導主事　鬼頭　洋司 東京都教育庁指導部義務教育指導課 指導主事　早川　裕之 茨城県鹿行教育事務所 指導主事　金澤　泰治

大会主題提案

グローバル社会を生き抜くために必要なコミュニケーション能力の育成

～　伝え合う力を育むための段階的な指導等の工夫を通して　～

１　はじめに

本大会の研究を始めるにあたって、授業公開を担当する水戸市が研究の柱として掲げたテーマのキーワードは、「小中連携」、「プレゼンテーションの工夫」、「即興性のあるやり取り」、「パフォーマンス評価」である。これらは水戸市が継続的に行ってきた小学校外国語活動から外国語科、それを引き継ぐ中学校外国語科の授業における取組から生まれたテーマであるとともに、小学校では令和２年度より、中学校では令和３年度より全面実施となった学習指導要領が目指す英語教育を実現するためのものである。

学習指導要領が求める、言語活動を通して知識・技能を習得し、活動の中で思考力・判断力・表現力等を高め、さらに、教育現場では「指導と評価の一体化」による授業改善が急務である。

令和３年１月、中央教育審議会では「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して―すべての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現―」の答申をまとめ、新しい時代の学校づくりの方向性を示した。答申からは急激に変化する時代の中で、子どもたちに必要な資質・能力は学習指導要領の着実な実施と GIGA スクール構想の実現によって育成するものととらえることができる。

新型コロナウイルス感染防止対策を講じての学習指導が続いている状況ではあるが、学校は学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け取り組んでいる。また、「指導と評価の一体化」による授業改善や子どもたちが自らの学びを振り返り、調整していく学習改善も進みつつある。

教育の大変革を迎えている今、インターネットを通じて世界各地の最新情報を得たり、SNS や Web 会議システム等の活用により海外の英語話者との「本物のコミュニケーション」をしたりすることが容易となった。自分の考えなどを表現するための「国際共通語としての英語力」の必要性はますます高まっている。

このような時代のニーズと学習指導要領に示された内容に基づいて、英語を使うことに慣れ、自分の思いや考えなどを英語で発信できる人材の育成を目指して、この茨城大会に向けて研究を行ってきた。

２　主題設定の理由

近年のグローバル化の急激な進展等の中で、子供たちが生き抜いていくためには、外国語を話せるだけではなく、コミュニケーションを通して互いの多様性を認め合い、自分の思いや考えを伝え合い、協働して問題を解決したり、新たな価値を創出したりする資質・能力を育むことが必要とされる。

このような背景のもと、本年度全面実施となった中学校学習指導要領には、「やり取り」や「即興性」を意識し、「伝え合う力」を育むための言語活動の取組とその工夫が必要であると明示されている。そして、その力を育むためには、子供の発達段階に応じた、系統的かつ継続的な指導が重要であると考える。また、学校段階間の円滑な接続のためには、小・中学校における一貫した学習到達目標の設定とともに、段階的な指導及び評価を指導改善に活かす工夫が必要と考えることから、本主題を設定した。

３　研究の概要

(1) 茨城県の取組（茨城県教育委員会）

①英語インタラクティブフォーラム（平成 11 年度～令和元年度）

21 年間に渡り、茨城県内全中学校・義務教育学校（後期課程）の参加のもと実施されてきた本事業は、授業を通じたコミュニケーション能力の育成を目指した取組である。３人一組で、与えられたテーマについて英語によるインタラクションを行う。英語学習における生徒の目指す姿として、「やり取り」の活動の充実

が図られ、茨城県の生徒の英語コミュニケーション能力の育成に大きく寄与した。

②英語プレゼンテーションフォーラム（令和３年度～）

新学習指導要領で求められる授業改善を目指し、英語インタラクティブフォーラムの後継事業として構築された。グローバルな視野をもち、他者と協働しながら課題を解決し、自分の意見を英語で発信する人財を育成することを目的としている。インタラクティブフォーラムで培ってきた「やり取り」の場面に加え、教科等横断的な課題解決型のテーマのもと、ICT を活用するグループプレゼンテーションを行う。参加者はプレゼンター側とリスナー側の２回において審査され、また、プレゼンテーション後は発表内容について生徒相互の「即興性のあるやり取り」を行うため、思考力・判断力・表現力等が必要とされる。

昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大により開催が見送られた。本年度第１回目を開催し、各校が即興性を養うために創意工夫を始めたところである。

③遠隔教育実証研究事業（令和２年度～）

本県の主催事業の一つに「誰一人取り残さず、すべての児童生徒が自分の力を最大限に発揮できる学び」の実現を目指し、オンライン教育をその学びを支える有効な手段の一つとしてとらえ、複数の教科において遠隔教育の実証研究が進められている。

英語科では、高度な専門性をもつ外部人材を活用し、特別免許状や臨時免許状を授与されたネイティブスピーカー及び英語力の高い日本人が、拠点となる学校に勤務し、拠点校の生徒の授業や兼務校の生徒への遠隔授業を実施している。遠隔授業を受信する兼務校では学習の習熟度に応じた少人数学習に取り組んでいる。

⑵ 各分科会の取組

①第１分科会　水戸市立緑岡小学校・緑岡中学校　『小中連携の実践的な取組』

緑岡小学校と緑岡中学校は施設隣接型小中一貫校であることの強みを生かし、これまで小学校６年生と中学校１年生の合同授業などを行ってきた。小学校外国語科の学びを中学校に円滑に接続するために、授業スタイルや教材、帯活動、表現用ワークシートの連携を研究してきた。

②第２分科会　水戸市立常磐小学校　『話すこと（発表）の言語活動の工夫』

小学校におけるプレゼンテーションスキルの習得と活動の工夫について提案する。プレゼンテーション活動に意欲的に取り組むための目的・場面・状況などの設定の工夫、表現力を高めるための Small Talk と RCQ(Reaction、 Comment、 Question)そして、聞く力の育成を図る活動の充実を中心に研究してきた。

③第３分科会　水戸市立第一中学校　『話すこと（発表）の言語活動の工夫』

中学校におけるプレゼンテーションスキルの習得と活動の工夫について提案する。本中学区にある常磐小学校の実践を継続することにより小中連携を図り、中学校ではさらに、発表内容についての即興的なやり取りの充実を目指し、帯活動を積み重ねてきた。また、計画的なプレゼンテーション活動の実施、適切な中間指導を通して使用言語の正確性を高めたり、内容をより豊かにしたりするとともに、ICT を活用することで活動への意欲を高める研究をしてきた。

④第４分科会　水戸市立第四中学校　『即興で伝え合う力を育む指導の工夫』

授業での帯活動を通して、即興でやり取りする力を養っていく。活動の中で適切な中間指導を行うことで、生徒の英語の正確性を高め、内容を豊かなものにしてきた。全校で CAN-DO リストに基づく指導や授業展開の統一（四中 Way）を図ることで、全校で即興力を高める研究をしてきた。

⑤第５分科会　水戸市立赤塚中学校『パフォーマンス評価を活かしたコミュニケーション活動の工夫』

単元ごとに行うパフォーマンステストの評価の在り方と、評価を活かした効果的な指導方法を追究してきた。活動の過程で、教師からの評価や生徒間の相互評価を通して、生徒が自らの改善点を明確にし、意的に活動に取り組めるようになることを目指す。生徒が客観的に自己評価できるようルーブリックの作成等を研究してきた。

記念講演

「漆塗り」の英語授業を
～新学習指導要領の実現を目指す指導と評価～

山田誠志

文部科学省 初等中等教育局教育課
情報教育・外国語教育課　外国語教育推進室
教科調査官

１．言語活動に取り組ませよう

言語活動の充実は、現行の学習指導要領においても強調されてきました。パターンプラクティスに終始する授業をほぼ姿を消し、様々に工夫された活動に取り組ませる授業が、全国の多くの中学校で実践されています。生徒の意欲を引き出したい、興味・関心をもって活動に取り組んでほしいという授業者の願いが現れたそのような授業は、参観させていただいている私も嬉しい気持ちになります。同時に、教材研究を始めとする授業準備に時間をかけられたのだろうと思うと大変頭が下がります。

しかし、ここで考えていただきたいことがあります。生徒に取り組ませているその活動は、言語活動でしょうか。

資質・能力は、言語活動を通して育成されます。英語の授業において言語活動に取り組ませることは肝なのです。練習に取り組ませることが必要であることは言うまでもありませんが、練習に終始する授業を繰り返していては力が付かず、できないこと分からないことが増え、その結果４月のころは楽しく取り組んでいたのに、今は意欲的に取り組んでくれないという生徒が半分もいないという辛い状況になってしまいかねません。

言語活動とは、「『知識及び技能』を活用し、『思考力、判断力、表現力等』を育成するために取り組ませる」ものです。以下、二つの例を示します。

［例１］

「学校に新しく来るＡＬＴに、自分たちの町を好きになってもらうために、町の魅力を紹介する」という「書くこと」の言語活動の場合。①新しく来るＡＬＴはどのようなことに興味を持っているかといった情報を整理し踏まえるなど、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、町の何を紹介するとよいかなどの表現内容を考えさせ、②①を表現するために、学習した語や連語、文構造、文法事項等を活用させる必要があります。したがって、「まず、 “I want to tell you about ~.”を使って紹介したい場所を伝えましょう。次に、“You can see/eat/do ~.”などを使って、その場所でできることを伝えましょう。最後に、“I want you to like this place.”などと書いて文章を締めくくりましょう。」などのように、表現内容や、当該内容を伝えるために活用するとよい英語表現の多くを明示することは避けなければいけません。このことは、「書くこと」だけではなく、「話すこと［やり取り］」と「話すこと［発表］」も同様です。

［例２］

「同じ学級の〇〇さんが、『２学期の思い出文集 in English』に載せる原稿を書きましたが、どういうタイトルを付けるかで悩んでいます。〇〇さんの原稿を読んで、その内容にぴったりのタイトルを提案してあげましょう」という「読むこと」の言語活動の場合。①既習内容を活用して文章を読み、②〇〇さんが最も伝えたいこと、つまり「要点」を考えさせる必要があります。したがって、例えば教科書本文を読ませる際は、本文内容を理解しているかどうかをＱＡやＴＦで確認することに留まらず、要点を捉えさせるようにしなければいけません（当該文章に要点といえることが存在している場合）。なお、「要点」以外にも、目的・場面・状況に応じて「必要な情報」や「概要」を捉えさせる活動も言語活動です。このことは、「聞くこと」の言語活動も同様です。

言語活動に取り組ませることの重要性は、調査結果最からも明らかになっています。令和元年度「英語教育実施状況調査」の結果分析から、授業中生徒が言語活動に取り組んでいる割合が高い地域ほど、生徒の英語力の指標（CEFR A1 程度以上）が高いという結果が出ています。

２．言語活動に取り組ませながら学ばせよう

「１.」で言語活動に取り組ませることの重要性を述べました。しかし、言語活動に取り組ませることは、生徒にとって決して容易ではありません。例えば、先に示した［例１］であれば、自分たちの町の何を紹介するかと、それを英語でどう表現するかの両方を生徒は考えなければいけません。しかし、難しいからといって、できずに困る生徒が出ないように先回りして、上述したような「表現内容」や「英語」を活動前に明示してはいけません。活動の見通しがもてるよう最低限のことを示した上で、まずは生徒に取り組ませましょう。そして、活動後に指導します。どんなことを表現したか（表現内容の適切さ）と、それを英語でどのように表現したか（英語使用の正確さ）について指導（引き出したり気付かせたり）します。そして、学び合わせたことを踏まえ、再度、紹介文を書かせたり書き直させたりします。このようなサイクルの繰り返しで「書くこと」の能力を少しずつ身に付けさせていきましょう。すぐに力は身に付きません。一朝一夕で書けるようになるはずがないのです。１時間の授業でできるようにしようとせず、ゆったりとした構えで指導に当たろうとするなどの指導観をもっていただきたいと思います。単元や学期といった内容や時間のまとまりを見通した指導は必須です。上述の指導観をもち、「言語活動→指導→言語活動」のサイクルの繰り返しで能力を少しずつ身に付けさせていく指導が大切であることは、「書くこと」だけではなく他の領域においても同様です。このように、何度も取り組ませながら徐々に確かな力を身に付けさせる指導のイメージは、漆塗りのイメージと私は重なります。

言語活動に取り組ませると、難しさに悩む生徒の姿とは別の姿を目にすることができることもあります。それは、できないと思っていた生徒たちの、想定を超える頑張りです。例えば、教師が思い付かないようなユニークな発想の内容を表現したり、英語で表現することが難しそうな内容を意外な視点からパラフレーズしたりする生徒の姿です。このような「うれしい誤算」とも言える生徒の姿には、「表現内容」や「英語」を示し、教師が決めた枠内で活動させているときにはなかなか出会えないかもしれません。生徒の可能性は低く見積もってはいけないということなのだと思います。

３．言語材料は使用場面の中で理解させよう

新しく教える言語材料（以下「新出言語材料」という。）についても、「２.」で述べたことと同様、繰り返し聞いたり読んだり話したり書いたりさせながら習熟を図るようにします。また、使用させる前段階である導入場面では、当該言語材料を使用場面の中で捉えさせ、その言語材料の使われ方も理解させる必要があります。

右は、「平成 25 年度　中学校学習指導要領実施状況調査外国語（英語）」の設問の一部です。

本調査では、A、Bの二つの問題冊子を用意し、中学校２年生を対象として実施されました。A問題の正答は I don't like it. B問題の正答は I don't like です。it の有無の違いはありますが、どちらの問題も正答はほぼ同じです。しかし、正答率は大きく異なりました。A問題は 71.4%、B問題は 40.5%でした。この結果から推察できることの一つとして、知識は一定程度身に付いているかもしれないが文脈の中でそれを使用することには課題があるということです。

［A問題］
下線部を否定文にしなさい。
Mike: Do you play soccer?
Koji: No, I like it.　But I like tennis.
［B問題］
下線部に入る文を like を使って書きなさい。
Mike: Do you play soccer?
Koji: No, _____ it.　But I like tennis.

新出言語材料を導入する際、意味や形式を教えることに留まっているということはないでしょうか。生徒と英語でやり取りするなどにより新出言語材料の自然な使用場面を設定した上で当該言語材料を導入しましょう。そのような導入により、当該言語材料の使われ方（どのような場面で使用されるのか、その言語材料を使うとどのようなことを表現することができるのか）も理解させましょう。

４．指導と評価を一体化させよう

各領域の学習評価における各観点が評価することを以下に示します。

・「話すこと［やり取り］」、「話すこと［発表］」、「書くこと」

知識・技能	英語使用の正確さ
思考・判断・表現	表現内容の適切さ
主体的に学習に取り組む態度	言語活動で表出された態度

※「表現内容の適切さ」における「適切さ」とは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じた適切さです。

・「聞くこと」、「読むこと」

知識・技能	話されたり書かれたりしている意味そのものの理解
思考・判断・表現	「必要な情報」「概要」「要点」の理解
主体的に学習に取り組む態度	言語活動で表出された態度

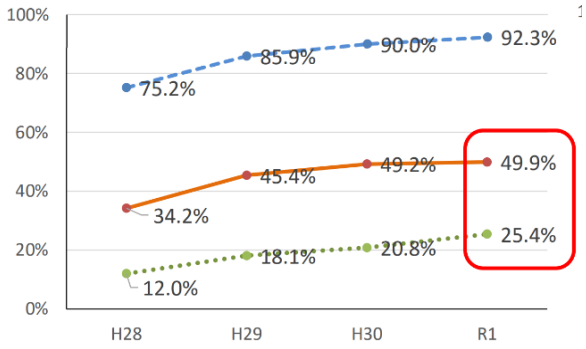
※「必要な情報、概要、要点」とは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じた必要な情報や概要、要点です。

上記の表中で示したことは、「２.」で示した「言語活動に取り組ませながら指導する視点」と同じです。例えば「話すこと［発表］」であれば、日々の授業で、言語活動中の生徒の発話を取り上げながら、「英語使用の正確さ」と「表現内容の適切さ」の二つの視点から指導します。そして、評価する際も、言語活動中の発話を、「英語使用の正確さ」と「表現内容の適切さ」から評価します。このようなことを指導と評価の一体化と言います。日頃の授業で、言語活動に一生懸命取り組むよう指導し、そのような姿勢で取り組んだ生徒を認めることは非常に重要です。しかし、そのような情意面からの指導（認めや励ましなど）だけで終わらないようにしなければなりません。「自己調整」を図ることができるようにするなど、見通しを持った意図的な指導を行い、資質・指導を確実に育成しましょう。

指導と評価を一体化させるためには、定期テストやパフォーマンステストを改善することも非常に重要です。

定期テストについては、例えば、「読むこと」の「知識・技能」は書かれている英語の意味そのものを理解しているかどうかを評価し、「思考・判断・表現」は、「必要な情報、概要、要点」を評価します。定期テストだけで評価するわけではありませんが、定期テストも評価する重要な機会です。したがって、定期テストにおいても、「知識・技能」と「思考・判断・表現」を評価する問題を出題する必要があります。いわゆる「長文問題」と言われる問題で、例えば「文章の内容に合っているものを次のア～エから選びなさい」といった設問は、「思考・判断・表現」を評価できないかもしれません。「知識・技能」だけを評価しているのであれば、このような設問とは別に、必要な情報や概要、要点を問う問題が必要です。読ませる文章は当然初見のものとします。初見の文章を準備する方法としては、教科書本文を部分的に書き直す、そのような書き直しをＡＬＴに依頼する、教科書や副教材に掲載されている「聞くこと」の活動や練習のスクリプトを活用する、「えいごネット」(www.eigo-net.jp) に掲載されている文章を活用するなどが考えられます。

ここまで、指導と評価を一体化させることの重要性について述べてきました。指導したことを評価することと同じように重要なことは、設定した目標の達成状況を把握（評価）することです。ここで、平成 28 年度から令和元年度までの英語教育実施状況調査の調査結果（学習到達目標に関する調査結果）の一部を以下に示します。上の折れ線グラフは設定している学校の割合、真ん中は達成状況を把握している学校の割合、下は公表している学校の割合を示しています。



学習到達目標は大変多くの中学校で設定されるようになってきています。一方、当該目標の達成状況を把握している学校の割合は 49.9%です。指導は目標を達成するために行われます。指導と評価は一体化されていなければなりません。つまり、これら三者は密接に関連付けられていなければなりません。定期テストやパフォーマンステスト等の改善を図り指導と評価を一体化し、学習到達目標の達成状況を把握している学校の割合が大きく増加していくことを願っています。

以上、指導と評価の一体化について述べました。学習評価については、ここで述べたことの詳細や、紙面の関係で述べられなかったことを「『指導と評価の一体化』のための学習評価の参考資料」に記述しました。必ずお読みください。

５．おわりに

生徒の可能性を引き出し伸ばす英語教育を実現させましょう。生徒も教師も感動を味わうことができる実践を行いましょう。感動は、さらなる勤労意欲と学習意欲を生み出すことでしょう。そのような実践を行う上で欠かせないことは、「すぐにできるようにはならない」「繰り返し取り組ませながら徐々に力を身に付けさせていく」という指導観に立った実践です。「漆塗り」の英語実践がどの教室でも行われることを心から願っています。

第１分科会

小中連携の実践的な取組

授業公開　水戸市緑岡小学校

水戸市緑岡中学校

提　　案　流山市立南流山中学校

所沢市立安松中学校

つくば市立みどりの学園義務教育学校

花貫渓谷

第１分科会

小中連携の実践的な取組

～　小中一貫の授業スタイルや教材の連携の在り方及び相手の意見に対して、
質問、相づちやリアクションを用いて会話ができる児童生徒の育成　～

茨城県水戸市立緑岡小学校　教諭　杉嵜　祐斗
茨城県水戸市立緑岡中学校　教諭　川俣　梨恵

１　研究の方針

「グローバル化に対応した英語教育改革五つの提言」（平成 26 年９月）において、「これまでの成果と課題を踏まえながら、 小・中・高等学校が連携し、一貫した英語教育の充実・教科のための改善が求められる。その際、英語を「聞く」「話す」「読む」「書く」の４技能を活用して実際のコミュニケーションを行う言語活動を一層重視し、小・中・高等学校を通じて、授業で発音・語彙・文法等の間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することと、英語を用いてコミュニケーションを図る体験を積むことが必要である。」とあり、小中連携の重要性が示されている。

本分科会では、「小中連携の実践的な取組」というテーマのもと、小中学校での外国語教育の一貫した授業スタイルや教材の連携の在り方とともに、学年の発達段階に応じた系統的・継続的なコミュニケーション能力を育成するための段階的な指導について研究をしている。緑岡小・中は水戸市から施設隣接型小中一貫校と認定されており、恵まれた環境にあることから、これまでも小中の教員同士の情報交換や交流、相互授業参観や出前授業等、様々な小中連携を図ってきた。また、その小中連携の強みを生かし、外国語教育においては、相手の意見に対して、質問、相づちやリアクションを用いて積極的に「やり取り」ができる児童生徒の育成のため、小中間で協力・交流しながら、授業における工夫を重ねてきた。

２　研究の内容

(1)　９年間を見通した CAN-DO リストの作成

小学校と中学校の教員が話し合い、小学校１年生から中学校３年生までの一貫した CAN-DO リストを作成し、中学校卒業年度の目標達成を見据え、各学年の達成目標を設定しながら授業を展開している。中学校教員は小学校での到達目標を知り、小学校６年間での目指す児童像を把握して中学１年生の指導に取り組んでいる。小学校教員は、中学校３年間の達成目標を理解し、中学校入学までに児童をどのように指導し、英語力を育成していけばよいのかを考えている。９年間を通した CAN-DO リストを作成することで、それぞれの学校で目指す児童生徒の姿を共有したり、授業づくりで大切にしていることを確認したりした。また、小学校では、単元を学ぶ際に、児童に中学校で学習する内容と関連した題材であると伝えることで、中学校での英語学習の意欲付けをするようにしている。中学校では、生徒とともに小学校での既習表現を再度確認し、さらに表現の幅を広げることで、自信をもって外国語学習に取り組めるようにした。

(2)　小中共通の Small Talk の実践

小学校では疑問文で提示していた Small Talk のトピックを、単語で提示することで、会話の展開を限定することなく、表現の幅の広がりを実感できるように工夫した。また、中学校では、小学校の教科書に掲載されていた Small Talk のトピックをそのまま活用し、小学校での既習表現をさらに発展させて話す機会を設定した。これらのことを通して生徒が小学校での既習表現を使いながら、意欲的に会話のやり取りをすることができるようにした。

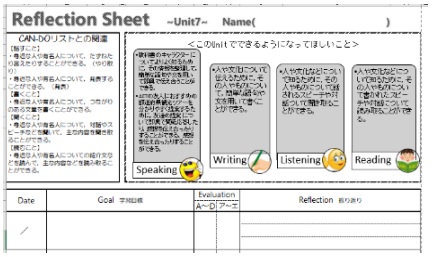
(3)　帯活動 MEET【Midorioka Enjoy English Time】の工夫

小中の共通の活動として、 3-Hint-Quiz（カードに載っている絵について、３文の英語で説明し、相手に推測してもらう活動）を積極的に行っている。トピックは動物・食べ物・有名人など小中で共通したものを使用している。ヒントとして与える表現も小中で共有し、それぞれの発達段階に応じて示したり、既習表現を生かして会話ができるように意図的にトピックを考えたりするようにしている。なお、中学校では、文の数を制限せずに、Picture Describing も定期的に実施した。

(4)　小中共通 Reaction Sheet（リアクションシート）の活用

小学校で使用したワークシートを中学校に引き継ぎ、習得状況に合わせ、内容を発展させたリアクションシートを中学校でも活用した。また、中間指導において、小学校での既習表現を引き出すことで、表現の幅を広げながらやり取りができるように促した。

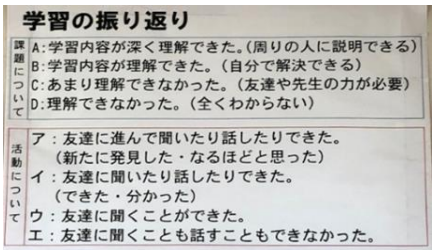
(資料１)



(5)　小中共通の Reflection Sheet（振り返りシート）の活用（※資料１）

児童生徒と教員が、児童生徒の個人の目標達成度を毎時間明確に把握できるようにするため、学習内容と CAN-DO リストとの関連や身に付けてほしい４技能の力を明記し、単元全体の目標を見通して学習することができるようにしている。また、緑岡小中全教科共通の振り返りの観点（※資料２）を教室右前面に掲示し、児童生徒は毎時間それを確認しながら、授業の振り返りをしている。

(資料２)



(6)　小中共通授業スタイルの確立

相互授業参観や出前授業を行い、共通の授業スタイルを確立することで、児童生徒の英語学習に対する不安を取り除き、中学校に進級しても戸惑いなく英語学習に取り組むことができるようにした。

３　研究の成果と課題

小学校では、上記の実践を通し、児童が「もっと話したい」、「こんな風に伝えたい」という気持ちが高まり、Big-voice・Eye-contact・Smile・Try-everything という「BEST」の姿で活動する児童が増え、児童のコミュニケーションを図ろうとする意識の向上が見られた。教員もそのような児童を英語で褒めるなど、積極的に英語を用い、教員の外国語教育への意識の向上も図れた。また、小学校から中学校への系統性を踏まえた授業づくりを実践することで、児童の意欲ある活動が見られるようになった。さらに、他教科等と関連付けた単元の工夫を行うことで、外国語教育を多面的にかつ広い視野で捉えることができるようになった。

中学校では、７月に英語に関する実態調査を行った結果、「小学校で習った表現を中学校の授業で使うことができている」という項目に対して、約８割の生徒が「よくできている、おおむねできている」と答えていた。このことから、小学校と中学校での英語学習のつながりを感じて、学習に取り組んでいることが伺える。また、10 月に実施した実態調査からも、小中共通の活動を行っていることで、「中学校の授業で、英語で話すことに抵抗を感じなかった」、「授業の進め方が同じだったので安心できた」、「活動の仕方が分かっていたので、英語の指示でも動けた」などの意見が多く見られ、生徒は中学校での英語学習に戸惑いを感じることなく、意欲的に取り組むことができているものと考える。特に、小中共通のリアクションシートの活用や 3-Hint-Quiz、Small Talk の実践を通して、英語を意欲的に話す前向きな姿勢が身に付いたり、相手の話した情報を聞いて、相づちやリアクションなどを積極的に返し、さらにそこから情報を引き出す質問ができるようになったりと変容が見られた。小中連携した授業スタイルや Midorioka Enjoy English Time（帯活動 MEET）などは、生徒にとっては有効だったと考える。

一方、課題も見つかっている。中学校ではおすすめの県や人などについての紹介などの活動でタブレット端末を活用し、即興での会話活動に取り組んできた。相手の言ったことに対して、「I see.」や「Oh、 really?」、「Me、 too.」のような基本的なリアクションをとれる生徒は多いものの、相手の話した内容に興味をもって、相手の意見に対する質問をすることができる生徒は、まだ一部である。R（Reaction）C（Comment）Q（Question）の Question のバリエーションが少なく、比較的 Yes／No Question に頼ってしまうことが多い。相手の話した内容に対する質問を、様々な疑問詞を使って英語で表現できるように、小中の外国語学習においてさらに練習を積み上げていく必要がある。

コミュニケーション活動において、目的意識や相手意識をもてるような活動を工夫することは必須であるが、すべての活動において取り入れることは容易なことではない。しかし、児童生徒がやってみたいと思う活動の充実を図るために、今後も小中で幅広くアイデアを出し合いながら、授業をより良いものにしていこうとする連携を継続していきたい。

また、活動や振り返りの小中の連携は行っているものの、評価における小中の連携はまだ実現できていない。児童生徒の活動を適切に評価する力をもつことは、授業力の向上にもつながることなので、今後の課題として、小中連携の中で実践していきたい。

第１分科会

小中連携の実践的な取組

千葉県流山市立南流山中学校　　教諭　溝井　隆之

１　研究の方針

外国語活動を通して、小中学校がスムーズに連携するためにはどうすればよいか。各校の取組を共有することで、特に中学１年生の抵抗感が解消されるのではないかと考えた。

さらに平成２６年度～平成２９年度に文部科学省から「外国語教育拠点事業」の指定を受けたことで、３校がさらに歩み寄りを見せる機会が増えるのではないかと考えた。

２　研究の内容(1)　Classroom English の統一

教室で教師から生徒へ。そして生徒同士で使えるようにすることを目指した。
中学校に入ってからも馴染みのある表現になり、抵抗感が解消できる。
①Stand up, Sit down.　指示ことば
②How are you? What's going on?　あいさつ
③Good! Nice! Excellent! やりとりことば
④Thank you. You're welcome. 反応のことば

(2)　CAN-DO リストの共有
流山市では、小学校から中学校、そして高等学校までの CAN-DO リストを作成。
教師側が目指す生徒像を共有することで、より連携を意識した活動を行うことができた。

(3)　Performance Test の評価項目の統一
各単元ごとに行われるパフォーマンステストの評価項目を小中で統一。
そうすることで、中学校に行っても自信を持って英語に取り組める生徒が増えた。

(4)　文法の導入の工夫
中学校で、新出文法を導入する際に、小学校でやってきた活動を踏まえて、Oral Introduction に取り組んでいる。

(5)　お互いの意見交換を大切に
近隣の小中学校３校で情報交換を行う日を設けている。
年間４回で、今小学校の先生が抱えている悩みの解消や中学校側の活動を紹介する貴重な機会である。

３　研究の成果と課題

(1)　ネット配信等を駆使してつながりを強めたい。
コロナ禍であつまりにくい状況になっているが、その場合でも Teams 等の映像配信を使って、お互いの授業を気軽に参観できるようにしていきたい。

(2)　中学生が小学生へアプローチできないか。
中学生から小学生への授業サポートや交流会ができないかを検討している。

第１分科会

効果的な読み書き能力育成プログラム

～　小中連携の観点から　～

埼玉県所沢市立安松中学校　教諭　山井　葉里子

１　研究の方針

小学校では昨年度から、中学校では今年度から新学習指導要領となった。新学習指導要領解説の中では旧学習指導要領の課題を以下のように挙げている。①音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない。②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある。つまり、旧学習指導要領においては小学校英語で培った音声中心の英語と中学校での読み書きも含めた英語がうまく連携されず、読み書きが苦手な生徒を生み出してきたといえる。そして中学校の現場では今もなお、理論に基づいた体系的で効果的なリタラシープログラムは周知されていない。本研究では、初期学習者がどのようにリタラシーを身に付けるのかの理論を明らかにし、小中連携の観点から効果的なリタラシープログラムを提案した。

２　研究の内容

(1) 初期リタラシーの発達

日本人を対象とした英語の初期リタラシー指導の手順は以下の通りである。

① 英語の音への気付き（・音への気づきを促すようなインプット・音韻認識活動）
② アルファベットの知識
③ 音と文字の結びつけ・フォニックス
④ サイトワード（音と文字の規則性のない単語フラシュカード等で形で覚えさせる）
⑤ 読解（解読・音読・多読）

いわゆるフォニックスの指導は、①　英語の音への気付き　②　アルファベットの知識が十分に身についている段階で行わなければ効果も薄いとされる（アレン玉井、2010）。

しかし今までの英語教育の中では、上記の二つの指導は適切に行われてこなかった。さらに言えば、今までの中学校での指導は、①～④の段階的な読み書きの指導を行わず、⑤の段階である教科書の読解を始めていた。結果としてたくさんの読み書き困難な生徒を生み出していたといえる。また、音読指導に関しても「ただ回数を多く読ませる」音読指導にとどまり、本当の読解力をつけるための音読にはなっていない傾向がある。本当の読解力をつけるためには「単語を正しく、意味のある文法的なかたまりにまとめることができる力」「文章に意味を持たせるために、どこを強調するかということやどこで休符を使うのかということを決定することができる力」、いわゆるプロソディ（イントネーション、ストレス、テンポ、そして正しい語句のまとまり）を意識した音読でなければならない（National Reading Panel,2000）。生徒たちに英語の読み書きの力を効果的に身につけさせていくためには、上記のような段階的な指導および、音読の仕方の改善が必要であるといえる。

(2) 初期学習者における効果的なリタラシープログラムの提案

理論を踏まえて、初期学習者に対する効果的なリタラシープログラムを提案する。このプログラムでは小学校3年生から、毎時間5分～10分の時間を読み書きの力を育成する時間としてカリキュラムに沿った活動を行う。

① <u>音への気付き（音韻・音素認識活動）</u>

音韻認識とは「話されている言葉の音の構造が理解できる力、言語の中にある音を操作できる力」と定義される。英語では音韻認識活動を通して、音素（認識できる最小単位の音）を認識できるようにすることが非常に大切である。英語圏の子どもたちも①話し言葉⇒②音節⇒③onset/rime⇒④個々の音素というように言葉の構造を理解していく。Onset（頭子音）　とは単語の中にある最初の子音のことであり、rime はそのあとに続く母音と子音のかたまりのことである。（たとえば cat ⇒ c / at　dish ⇒ d / ish）この onset と rime で分ける

ことは、日本人学習者には難しく、日本人学習者は英語の音もモーラ(子音+母音)で捉える傾向がある。(たとえば cat ⇒ca/ t) onset と rime が個々の音素を認識する前段階であることからも、日本人学習者も onset/rime の聞き取りができるようになることが重要である。

そのため４年生で音素体操（アレン玉井 2010）や５年生で onset の聞き取り活動、６年生で rime の聞き取り活動を入れて、音韻・音素認識能力を段階的に高めていく必要がある。

② アルファベットの知識

アルファベット指導で大切なことは、効果的な読み書き能力につなげるためにはアルファベットの指導をするときに正しい音で教えることである。正しい音を教えることで、日本語にはない独特な英語の音に慣れ親しむことができる。(B,V) (M,N) (G,Z) の音の違いも聞き分けられるようにする。そして複数の文字の処理もすばやくできるようになるところまで持っていくことが重要である。

③ フォニックス

上のリタラシー育成図からもわかるように、フォニックスの導入時期は頭子音（onset）の聞き取り活動が一通り終わり、小文字を書けるようになった段階で始まる。これよりも前にフォニックスを入れると、他の要素がフォニックスの理解を妨げてしまう。フォニックスの指導手順は右の図の中に提示してある。

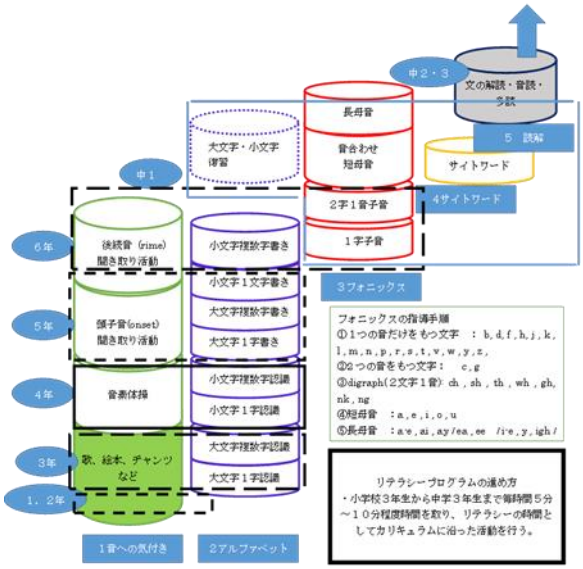


図１　効果的な読み書き能力育成プログラム

④ サイトワード　フォニックスのルールに当てはまらない頻出単語を形で覚えていく。

⑤ 読解

教科書を読ませるときに気をつけたい点が、「最初からモデルリーディングを与えない」ということである。平成 29 年度の検証授業により、フォニックスはその指導だけで終わってしまうと、その技術をその後のリーディングやライティングの際に使わないということが明らかになった。つまり、新しい単語、新しい英文を読む際にまずは、自分でフォニックスの技術を使って「読んでみる」という段階を加えることが非常に重要である。また、単語のスペリングを覚えるときも「フォニックスのルール通り読んでみる」「発音した通りに書いてみる」というアプローチで、覚えなければいけない量がずいぶんと減り、語彙の定着を図ることができる。

３　研究の成果と課題

・　音と文字の結び付けの強化（平成 29 年度２年生結果→平成 30 年度１年生結果）

「ｆ」４８％→７０％　「ｌ」１３％→８４％　「ｗ」５７％→９５％

・　初見の単語や文を自分で読もうとする。

初見の単語をどれだけ読もうとするかのテストを行った。平成 29 年度の調査で最も「読まない」割合が高かった「understand」という単語も平成 30 年度の中学１年生の８８％の生徒がフォニックスの知識を使って読もうとした。(前回４０％)。

・　プロソディックな音読

・　英語の授業のレベルアップ・スピードアップ

（ディベート・より高度なリーディングタスク・単語導入にかける時間の短縮）

段階的な読み書き指導によって、新しい単語や文も臆せず自分の力で読める生徒を育成することができた。一方で課題は、スラスラ読み（Fluency）の先にある理解の能力 （Comprehension）をいかにつけていくかである。新しい単語や文も音声化してスラスラ 読んではいるものの、いざ問題を解くとなると理解度にばらつきがあるのが現状である。文字に慣れ親しんだところからいかにして英文理解の能力をつけさせていくかは今後の課題である。 一方で、中学 2 年生の 2 学期にかなり質の高いディベートの授業を展開することができた。それは、この読み書きの基礎力に起因すると考えている。読み書きの基礎力をつけることで他の技能も効果的に伸びていくことや、幅広い活動ができることを今後は研究していきたい。

第１分科会

英語で自分の意志や思いを発信する力を育成する授業の実践

～　小中一貫教育を意識した段階的な活動を通して　～

茨城県つくば市立みどりの学園義務教育学校　教諭　吉田　圭介

１　研究の方針

学習指導要領では、言語活動の充実を通して４技能を統合的に活用しながら言語材料の定着を図ることが求められている。本研究では、自分の意志や思いを発信する力を育成することをねらいとし、生徒が意欲的に４技能を統合して活用させながら「話す」力を中心にコミュニケーションを図る資質・能力や意欲を高めていきたいと考えた。また学習指導要領で育成を求められている即興力を高めるための指導もあわせて必要であると考え、Small Talk 活動の工夫（やり取りする力の育成）と、プレゼンテーション活動の工夫（発表する力の育成）を通して本研究を実践した。

２　研究の内容

(1)　研究の目的

「話す」力を中心にコミュニケーションを図る資質・能力や意欲を高めていく。

(2)　実践

①５～９年生の Small Talk 活動の工夫

発信力を高めるための基礎となる力の育成を目指して、５年生から Small Talk の活動を継続して行っている。生徒が英語を使う場面が増えるとともに、英語で自分の伝えたいことを表現する方法、聞き手としてのリアクションや質問の仕方など、継続してこそ身に付く力があると考え、実践した。各学年で指導の仕方は段階的に工夫しているが、全学年で Small Talk の指導の仕方を統一して、小中のスムーズな接続を図っている。指導の仕方として、①トピックの紹介、②Thinking time（自分で考える時間）、③Small Talk（英会話）、④Question time（中間指導）、⑤Small Talk（英会話）の流れを、相手を変えながら毎時間行った。前期課程（５，６年生）では、英語での表現方法をある程度練習したうえで、その文の形を使って、自由に英語で相手と会話をする。トピックは教科書にも題材として出てくるような、日常的な場面で自分の気持ちや意見を述べる、簡単なトピックにしている。後期課程（７～９年）では，日常的な会話に加え、段階的に学習指導要領でも求められている「社会的な話題」も加え、まずは英語で会話させている。加えて Small Talk で話したことを「書く」活動も同時に行い、統合的に力を育成させるとともに、Small Talk で話した内容が蓄積できるよう試みた。Small Talk を継続したところ、生徒の英語を話すことへの抵抗感は少なくなり、毎時間笑顔で会話できるようになっている。英語が苦手な生徒も「友達と英語で話ができてうれしい。」や、「わからない表現を言えるようになると自信になる。」などの意見が見られた。また、Question time（中間指導）の継続により、英語にするには難しいと思われる表現も、簡単な文に言い換えるという意識も身に付いている。6 年生から 7 年生になる際の小中接続の場面でも、最初の授業から Small Talk の活動を同じ指導法で行うことができ、生徒もスムーズに中学校での授業に臨めている。また、後期課程では Small Talk の後に Writing の活動を行っているが、「書く」ことで英文の正確さを意識したり、自分の使いたい語彙や表現を蓄積したりすることができている。

②プレゼンテーション活動の工夫

プレゼンテーション活動は「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」の４技能を統合的に活用し、相手に自分の思いや考えを伝える活動である。また工夫次第で互いにインタラクションを生むことができる活動でもある。生徒がより意欲的に発信力を高めるためには、日頃実践しているプレゼンテーション活動を見直すことが、より効果的であると考えた。そこで「ミニプレゼンテーションフォーラム」を実施した。準備した発表を全体

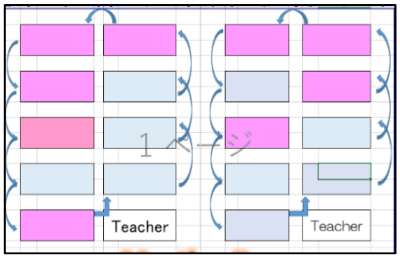


図１　ミニプレゼンテーションフォーラムの発表方法

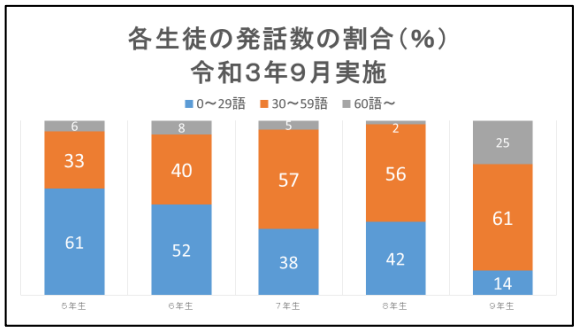
で１回発表するだけでなく、図１のように何度も繰り返し相手を変えながら発表し合う形とした。また、相手の発表に対してのリアクションや質問を積極的にするよう促し、お互いにインタラクションのある活動になるようにした。その後、Speed(速さ)、Voice(声量)、Facial expression(表情)、Picture presentation（絵の見せ方）の４点について相互評価を行う。ミニプレゼンテーションフォーラムの活動を通して、英語が苦手な生徒も意欲的に発表に取り組めている。現在の９年生は、７年生の時はお互いに発表しても約 40 秒程度しか話すことができなかったが、現在では３分を超えても話し続けることができている。「相互評価で相手からいいコメントをもらって自信がついた。」、「友達が興味をもって聞いてくれたことがうれしくて、自分もすすんで友達の発表にリアクションしたり、質問したりすることができた。」という声も聞こえた。その繰り返しによって、ただ一方的に発表するだけでなく、Interaction（やり取り）がある活動にしようという意識も出てきた。繰り返し発表し合うことで、自分の発表に対して相手に質問されたことを、次の発表の際に自分の発表に最初から付け加えて話す生徒の様子も見られ、活動の中でプレゼンテーションの質や内容が膨らんでいることも成果として見られた。

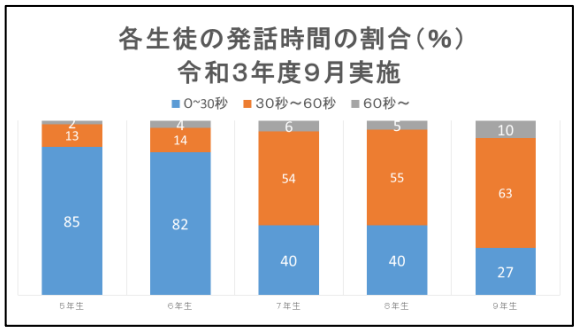
３　研究の成果と課題

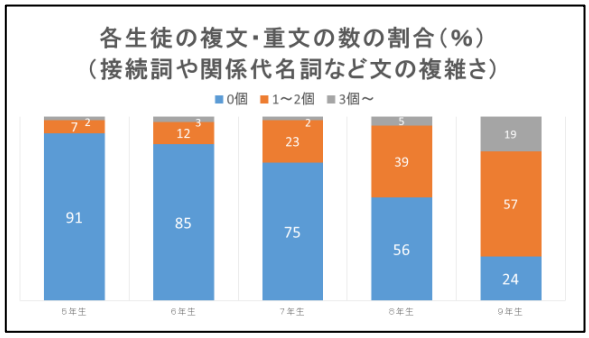
現在の９年生の AET によるコミュニケーションテスト(令和元年度と令和２年度)の結果を見ると、１分間続けて英語で会話できる生徒の割合が増えており、即興で話す力や、会話を続ける力が身に付いていることが分かる。また、８年生の時の英検 IBA のテスト結果を見ると、約６割の生徒が「話す」力と「書く」力において、「英検３級合格レベル以上」の力を示した。これは帯活動として継続してきた Small Talk や、それとともに行ってきた Writing 活動の成果が出ており、統合的に力が育成されたと考えられる。

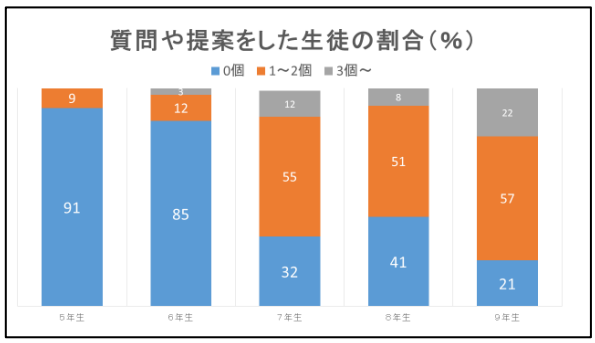
また、５年生から９年生までのスピーキング調査の結果（オーストラリアのホストファミリーに自己紹介をしよう）を見ると、発語数や発話時間、文の複雑さは学年を追うごとにおおむね順調に力を付けていた。質問や提案をした生徒の割合も増加しており、継続した活動により相手を意識して話す（やり取りする）力も身に付いていると考えられる。義務教育学校の特性を生かし、５年生から９年生までの５年間、Small Talk の指導の仕方を共有し、継続して行っている成果が明確に出ていることが分かった。

課題としては、Accuracy（正確さ）についての指導である。帯活動の Small Talk では、「話すときは間違ってもよいから意志が伝わるように楽しく話そう、まちがっても OK 」と学園生には声をかけている。後期課程では「書く」活動においての文の正確さにおいては重視して指導しているが、「話す」活動においては Small Talk の Question time（中間指導）の中で指摘する程度である。Accuracy の育成においては、日々の授業での Input 活動も大切なので、帯活動だけでなく、単元や毎時間の活動計画の中で４技能を総合的に育成できる計画を立て、言語の使用場面なども工夫しながら指導していくことで、力を高めていきたい。また、今回のスピーキング調査では、「スピーチ」の力を見たが、実際の「やり取り」する場面での話す力の変化にも重点を置いて、成長の様子を分析し、授業にフィードバックしていきたい。









資料２　スピーキング調査の結果

第2･3分科会

話すこと（発表）の言語活動の工夫

授業公開　水戸市立常磐小学校

水戸市立第一中学校

提　　案　みどり市立笠懸南中学校

真岡市立真岡中学校・芳賀町立芳賀中学校

笠間市立岩間中学校

常陸太田市立金砂郷中学校

日立さくらまつり

第２・３分科会

話すこと［発表］の言語活動の工夫

～　プレゼンテーションスキルの基礎の習得と活動の工夫　～

茨城県水戸市立常磐小学校　教諭　柏原　麻奈

～　プレゼンテーションスキルの向上を目指した発展的な指導を通して～

茨城県水戸市立第一中学校　教諭　久保田　奈緒

１　研究の方針

小学校及び中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語編　第２章　第１節では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」について、「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界、他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること」と示されている。外国語科の目標は、この「見方・考え方」を働かせて、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することである。このことを受け、話すこと［発表］については、聞き手や読み手の意見や考えを参考にしながら、自分の考えなどを再構築することを目指し、将来英語を使って積極的に自分の考えや情報を発信し、国際社会で活躍できるようになってほしいと考えている。

第一中学校区では、より質の高い学びにつなげるため、同中学校区の小学校２校との連携を図る手段として、９年間の学びの連続性を意識した相互授業参観や合同教科部員会、さらには授業教材の共同作成を行った。

常磐小学校では、「プレゼンテーションスキルの基礎の習得と活動の工夫」を副題とし、間違いを恐れず発表に取り組む態度の育成を目指した。また、相手の意見を自分の考えに反映するためには、相手の話をよく聞くこと等を通して、相手意識を育むための発達段階に応じた指導が必要であると考え、研究を進めた。

第一中学校では、「プレゼンテーションスキルの向上を目指した発展的な指導を通して」を副題とし、小学校での学びをいかすとともに、その発展的な取組として、発表内容をより良いものにするための研究を進めた。プレゼンテーションの内容について即興性のあるやり取りを継続して行うことにより、発表内容や使用する表現について新たな発見や気付きが生まれ、自分の考えなどを再構築した、より良い発表につながると考えた。

２　研究の内容

(1)　第一中学区の小中連携による取組

プレゼンテーションの指導にあたっては、小学校でその基礎を習得できるよう、合同で教科部員会を行った。これまで、小学校における CAN-DO リストには明確な目標がなかったため、低学年、中学年、高学年と段階を経て、発表できる内容や量について目標を定めるとともに、中学校も含めて９年間を通した系統性のある明確な目標を立て、目指すべきゴールについて共有することから始めた。さらに中学校での発展的な指導へつなげるために重要視したのが、即興性である。本研究では、プレゼンテーション後の即興性のあるやり取りを、プレゼンテーションの内容を再構築するための手立てと位置付けている。

(2) やり取りと発表の充実

①常磐小学校の実践

Ⅰ　Small Talk の工夫

児童が話したくなり、本当の気持ちを引き出すことができるように、トピックは児童から募集したものの中から設定した。また、児童に使わせたい英語表現を意図的に使うなどして、グッドモデルを示すことができるように、JTE と AET の役割を明確にすることを心がけた。

Ⅱ　RCQ の活用

プレゼンテーションやスモールトークにおけるやり取りの中で、児童が相手の気持ちや反応に配慮しながら聞くことができるよう、RCQ カード（リアクション・コメント・クエスチョン）を用いて、意欲的にコミュニケーション活動に取り組めるようにした。中間指導においては、児童から出た疑問点を全体で共有し、解決する場を設けることで、児童が表現の幅を広げようと主体的に課題に取り組む姿勢を育成した。

Ⅲ　目的・場面・状況などを考えた課題設定

ICT を用いて他校の AET や、中学校の教員と交流を図ったり、家庭科等と関連し、教科等横断的な授業を展開したりすることができた。その結果、児童が明確な相手意識をもち、英語をツールとして自分の考えや気持ちを伝えようとする意欲の向上につながった。

Ⅳ　「聞く力」の育成

実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるためには、必要な情報を聞き取り、整理した上で再構築する能力が求められる。校長先生など身近な人や、他校のAETなど会ったことがない人の好みや趣味を聞き取り、メモやディクテーションをする機会を多く設けることを通して、相手の要望に沿ったものを提供することができるよう配慮した。

②第一中学校の実践

学校全体で「生徒が自身の考えを発表し、それに対する意見を述べ合う場を多くする工夫」という研究主題のもと、各教科等の様々な場面で生徒同士が意見を述べ合う場を設定している。英語科においては、プレゼンテーション活動を各単元末に設定し、その発表内容に対して生徒同士が即興で質疑応答したり、意見を述べ合ったりすることを手立てとして講じ、プレゼンテーションスキルの向上を目指した。

Ⅰ　帯活動の工夫

ⅰ　Small Talk

小学校においてたくさん積み重ねているやり取りの経験が十分に生かされるよう、教師と AET のデモンストレーションや教師と生徒、生徒同士のやり取りでは、テーマにたくさんの選択肢を与え、生徒が、「自分が話したいこと」を率直に伝えられるような時間になるようにしている。

ⅱ　３ sentences speech and QA

プレゼンテーションに質問タイムを設けたが、初めは全く質問をすることができなかった。そこで、興味をもって話を聞いている姿勢を見せるために質問をすることの大切さを繰り返し伝えるとともに、質問力を上げるために、この活動を取り入れた。発表者は、与えられたトピックについて３文しか話すことができないので、聞き手は、さらに情報を得るために様々な質問を考えるようになった。そして活動を重ねた結果、生徒自身が、「聞き手が発表者に質問をすることで、話したい内容を深めることにもつながる」と実感できるようになった。

Ⅱ　単元計画、ルーブリック表を活用した振り返りシートの工夫

生徒の「主体的な学び」を実現するためには、見通しをもって粘り強く取り組むとともに学習活動を自ら振り返り、身に付いた資質・能力を自覚して次の活動につなげることが必要である。そのための手立てとして、「単元計画、ルーブリック表」を生徒用に作成し、活用している。生徒が理解しやすい表現で、「単元のゴール」や「今日の目標」を示すことで、生徒自身が「今日の授業では、何ができるようになればいいのか」と授業前に確認する場面も増え、生徒の「主体的な学び」に近付くことができた。また、授業の振り返りをする際にも、このルーブリック表を参考にして「何ができるようになったか」を確認する生徒が見られるようになった。

Ⅲ　中間指導（Sharing time）の充実

生徒の質問に答えるためだけではなく、机間指導を通して良い表現や間違いの多い表現を見い出し、全体で共有している。また、Small Talk の中だけではなく、授業中にいつも意識的に設定することで、生徒は、表現の幅をより広げることができている。さらに、やり取りを通してプレゼンテーションの内容を推敲し、より良いものとするために、単調になりがちであったリアクションのインプット活動を行ったり、中間指導で良いリアクションやコメントも共有したりすることを意識した。

Ⅳ　ICT の活用

一人一台端末が導入され、コロナ禍におけるオンライン授業でも、より「対話的な学び」ができるよう工夫してきた。本研究では、発表スライドを作成したり、実際に海外の人たちとビデオメッセージのやり取りをしたりした。また、Google Sites を活用し、学習内容を共有したり授業の振り返りをしたりすることができるようになった。

３　研究の成果と課題

小中共に英語を使って発表することへの抵抗がない児童生徒が多くみられるようになった。間違いを恐れ、原稿を作らなければ発表ができなかった児童生徒の中に、完璧に伝えようとする気持ち以上に、目的・場面・状況などに合わせて「伝えようとする態度」が育ってきたことこそが大きな成果であると感じている。また、Small Talk をはじめ、他者とのコミュニケーション活動を通して、質問のバリエーションが増えたり、中学校ではやり取りの継続にも効果が見られたりした。小学校では、児童の積極性が育ってきたので、さらに相手の反応を見て対応できる即興性を身に付けることできるようになってほしいと考えている。また、中学校では、生徒が興味をもってプレゼンテーション活動をしようと自分から思うことができる場面の設定に難しさを感じている。今後も英語を使って自分の考えや気持ちなどをさらに積極的に発信できる児童生徒の育成を目指し、研究と実践を続けていきたい。

第２・３分科会

話すこと（発表）の言語活動の工夫

～グローバル社会で活躍する素地の育成を目指して～

群馬県みどり市立笠懸南中学校　教諭　渡辺　智哉

１　研究の方針

グローバル社会で活躍するためには、「堂々と意見を述べる」ことが必要と考え、自信をもって意見を述べるためには、それを支える知識や情報量が必要と考える。情報量を増やすことで、根拠を含んだ発表が可能になり、堂々とした姿勢で他者への発表を行わせたい。

また、相手に自分の意見を伝える際には、相手に対し、どのような伝え方が分かりやすいかを考えさせ、生徒自身が確認、修正を繰り返し、工夫をしながら自身の理想の発表に近づけさせたい。

２　研究の内容

(1)　堂々と意見を述べられる生徒の育成について

①　みどり市の目指す生徒像の課題を捉え、「語彙力」「表現方法」「独自性」に焦点を当て、それらを改善する具体案と共に単元計画を作成、単元終末のプレゼンテーションまで、計画的な言語活動に従事させる。

②　学習到達度(CAN-DO)を設定し、少しずつ単元の目標に迫らせることで、伝える活動を何度も繰り返し行い、伝える機会を増やす。

③　生徒に与える情報量を、各授業において小分けにすることで、少しずつ生徒が得る情報を増やしていき、単元終末での発表に向けて計画的に考え、準備させる。

(2)　「つかむ」活動から「追求する」へ

①　単元に関した生徒に与える情報量を増やすことで、単元に対する課題や疑問をもたせ、主体的な課題解決活動を促す。また、単元の最初で、「なぜ」や「私たちにも何かできないか」など、教科書の内容を身近な問題として捉えさせる。

②　ペア・グループワークを通して情報量を更に増やしながら、他者へ伝える言語活動の機会を多く与え、自分の提案をどのように他者に伝えたら良いか、その方法を考えさせる。また、タブレットを活用して、セルフチェックを何度も行わせることで、工夫の幅を広げ、生徒一人ひとりが個性に応じた発表を目指させる。

③　相手が分かりやすい発表にするためにどのようなことが必要か、評価基準を定め、生徒に伝えることで、どのような表現の工夫が求められ、どのようにすればより相手に伝わりやすいかを考えさせ、繰り返す。

(3)　「まとめる」活動においての独自性の伸張

①　他者に対する「わかりやすさ」として、どのような英語や表現が伝わりやすいか、難しい内容でも、どのような単語や表現を使えば伝わりやすいかに関する「言語面」と、どのような伝え方（声の大きさや、ジェスチャー、視覚的補助、ユーモアなど）に関する「内容面」、に分けた評価基準を定めた。その評価基準を生徒に公開することで、聞き手の意識を考えた工夫をさせる。

②　モデルスピーチを参考にさせることで、自分の個性や性格と照らし合わせ、自分の理想の発表イメージを持たせて練習をさせる。

③　ICT を活用し、セルフチェックを行わせることで、相手に分かりやすい発表に近づけさせると同時に、確認・修正に何度も取り組ませる。また、自身でのチェックに加え、録画した動画を先生や ALT に送り、指導を仰ぐ機会も確保した。

３　研究の成果と課題

(1)　生徒一人ひとりの個性にあった「まとめる（発表)」

①　一人 1 台端末になったことで ICT を活用した授業をおこなうことができた。これにより、発表時に Power Point を使用し、難しい内容を、視覚的補助を加えることで、聞き手に分かりやすい発表を心がけて行う生徒の姿が見られた。

②　モデルスピーチを何度も繰り返し視聴できる環境を作り、自分のスピーチも録画し、確認することで、自分の求める発表内容と現在の自身の内容との差異を確認、修正しながら、生徒が自信のもてる発表に近づくことができた。

③　Google form を活用し、教師以外に、生徒達が相互評価させることで、今まで以上に聞き手の興味を意識し、他者を惹きつけるために、ユーモアなどを含める工夫が見られた発表もあった。

(2)　自分の意見を堂々と伝え、グローバル社会で活躍する素地の育成

①　ICT を活用することで、これまでよりも多くの情報を生徒に与えることが可能となり、単元の課題に対する興味、関心、疑問、提案を持たせることができ、主体的な課題解決学習を行うことができた。

②　ペアやグループでの言語活動を通して、「伝える機会」を確保したことで、発表の工夫を促すことができ、繰り返し行うことで徐々に生徒に自信をもたせ、堂々とした発表を促すことが出来た。

③　対多数に対して、堂々と伝える経験を積んだことで、将来的に国際社会の一員として活躍できる素地を養うことができた。

第２・３分科会

「他者視点を生かした話すこと〔発表〕の段階的な指導の工夫」

～フィードバックの工夫を通して～

栃木県真岡市立真岡中学校　教諭　塚田　邦彦
栃木県芳賀町立芳賀中学校　教諭　篠崎　大輔

１　研究の方針

新学習指導要領では、教育活動全体を通して育成を目指す資質・能力を三つの柱に整理している。

ア「何を理解しているか、何ができるか（知識・技能の習得）」
イ「理解していること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等の育成）」
ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力・人間性の涵養）」

話すこと〔発表〕の領域において上記の資質・能力を育成するためには、段階ごとの適切な学習活動及び言語活動の設定と適切なフィードバックが必要である。そのため、話すこと〔発表〕の領域（言語活動）を指導する際の段階を次の３つの段階に分け、指導の工夫に取り組むこととした。

①生徒が表現するために必要な知識・技能を身に付ける段階（基礎・基本の確実な定着を目指す。）
②生徒が表現するための思考力・判断力・表現力等を身に付ける段階（言語活動に実際に取り組むことを通して、身に付けた英語を実際の言語活動で活用できるようにすることを目指す。）
③自分の思いや考えを堂々と表現できる力を向上させ、主体的に学ぶ力や自信を向上させる段階（自らの学びを振り返り、よりよく向上させていこうとする態度の育成を目指す。）
＊②と③は表裏一体的なものと考える。

さらに、自らの発表の内容や方法について振り返る際には、教師や級友といった他者からのフィードバックを得る機会を適切に設定することで、より主体的で深い学びを実現することができると考えた。

２　研究の内容

(1)　研究の概要

①　本地区では、真岡中学校と芳賀中学校による共同研究とした。
②　真岡中学校では、英語力を身に付ける段階、芳賀中学校では言語活動での活用の段階を中心に指導の工夫についての研究を進めた。
③　各段階の指導を進めるに当たっては、英語力や言語活動において、英語を活用し表現する力の向上を目的とした教師や同級生といった他者視点からのフィードバックの工夫について研究を進めた。
④　他者視点からのフィードバックの工夫として、他校の生徒からのフィードバックの機会も活用し、生徒の話すこと〔発表〕の領域における資質・能力の向上を目指した。
⑤　研究の過程では、言語活動とフィードバックの効果的な配置（単元を見通した指導計画、教科書の活用）を重視して取り組む。

(2)　研究の実際（紙面の都合上、芳賀中学校での取組を中心に紹介します。）

昨年度３月、当時の２年生が「おすすめの旅行プラン」をテーマにグループで発表。今年度６月には「修学旅行のおすすめスポット」をテーマにグループで発表。その２つの発表活動に向けて、どのような指導の工夫を行ったか紹介します。

＜段階１での工夫＞

① 単語や英文の継続的な音読指導（教師からのフィードバック）：音読指導の際に、発音やイントネーション、抑揚、間の取り方などに関するフィードバックを意図的に与えた。

② １対１の音読テスト（友達からのフィードバック）：単元ごとに教師と生徒が１対１の音読テストを実施し、その練習において、友達同士で読み方を教え合う時間を設け、お互いの良い点や参考にする点をフィードバックできるようにした。

③ ALT による発表のコツの解説や個別指導（ALT からのフィードバック）：発表に向けた練習では、ALT から発表のコツを教えてもらい、個別に指導を受ける時間を設け、より効果的な発表スキルを学べる機会を設定した。

音読指導の様子

友達同士での練習

芳賀中の発表を見る真岡中生徒

＜段階２・３での工夫＞

① 教師や同級生からのフィードバック：発表会において、一人一人が各グループの発表を評価し、それぞれのクラスの１位を決定した。また、ただ１位を決めるだけでなく、各グループ・個人にフィードバックできるように、コメントや助言を書いて伝えた。

② 他校からのフィードバック：真岡中学校に芳賀中学校の各クラス１位の動画を送った。真岡中学校の生徒は各グループの発表に対して、コメントや助言などのフィードバックをした。

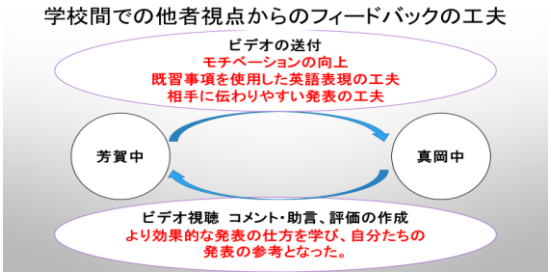
③ ②後の自校でのフィードバック：真岡中学校からのフィードバックを受けて、芳賀中学校では、次年度や次回の発表に生かせるように、コメントや助言からどこが良かったのか・どこが課題なのか、どうすればもっと良い発表になるのかを振り返った。

④ ③を生かした新たな発表への挑戦：前回のフィードバックをもとに、新たな発表活動に挑戦し、英語力の更なる向上を目指した。

３　研究の成果と課題

(1)　成果　「他者視点からのフィードバックによる指導の工夫」

①英語を用いた表現力（発表）の向上　②生徒のモチベーションの向上　の２点が見られた。３つの段階における他者視点からのフィードバックの効果的設定により、生徒の英語を用いた表現力（発表）の向上が図られた。また、学校間のフィードバックを活用することで、発表へのモチベーションが高まり、生徒が使用する言語材料を精選するようになり、文法的な知識を深めたり、語彙力を高めたりするなどの効果が見られた。



(2)　課題　「フィードバックにおける生徒の視点」

他者視点のフィードバックは生徒の励みになったが、生徒がコメントする際、発表する態度や映像資料に関する助言が多く、発表の内容そのものに対するコメントが少なかった。今後は、語彙や文法表現等も含めたフィードバックとなるような指導の工夫が必要であると感じた。

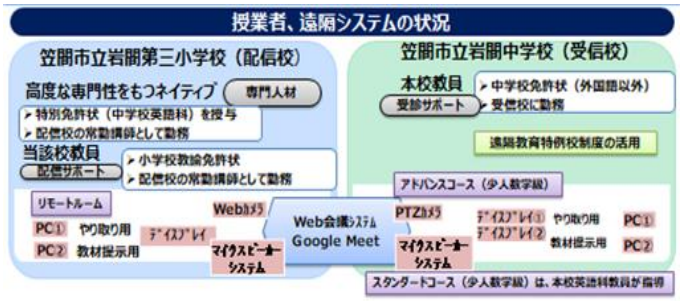
第２・３分科会

遠隔教育における「話すこと［発表］」の言語活動の工夫

～　高度な専門性をもつネイティブを活用したすべての生徒に対する質の高い学びを目指して　～

茨城県笠間市立岩間中学校　　教諭　田口　愛

１　研究の方針



中学校学習指導要領（平成 29 年告示）外国語の「話すこと［発表］」の目標には、「(イ) 日常的な話題について，事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする」と示されている。

本校では、昨年度より県教育委員会からの研究指定を受け、笠間市立岩間第三小学校を配信校、本校を受信校とし、英語科の学習において、Web 会議システムによる「遠隔授業」を実施している。遠隔授業では、すべての児童生徒に対して質の高い教育を実現し、学力向上を図るために、高度な専門性や優れた指導力をもつ人材を活用した遠隔教育の在り方について研究し、その成果の普及を図ることをねらいとしている。さらに、生徒が学習内容を確実に身に付け、伸ばしていけるよう、受信側である生徒を希望制の習熟度別（アドバンスクラス・スタンダードクラス）で少人数に分け、授業を実施している。

高度な専門性をもつネイティブを活用することで、生徒が教師や生徒同士でのやり取りを生かして、自らの考えを整理したり、まとめたりしながら、発表する力を育成したいと考えた。高度な専門性をもつネイティブの指導を生かし、反転授業、中間指導の充実、帯活動の効率化を行うことで、事実や自分の考え、気持ちなどを整理しながら、発表する力を育成できると考え、本研究課題を設定した。

２　研究の内容

(1) 遠隔教育について

令和２年度，３年度の２年間において，県教育委員会の「小中学校における遠隔教育実証研究事業」の指定を受けている。令和２年度は、６月から、配信校勤務のネイティブが直接本校を訪問し、生徒との関わりを深めるため、英語科担当教師や ALT との TT により、１年生全クラスへの対面による授業を行った。11 月から３月は、週４時間の授業のうち１時間、１年生アドバンスクラスの生徒を対象に、オンラインによる遠隔授業を開始し，週に１回程度の遠隔授業を実施した。令和３年度は、４月から２年生全クラスを対象に同様の方法で実施している。

(2) 目指す生徒の姿

遠隔教育における目指す生徒の姿を「ネイティブや生徒同士とのやり取りを通して、自分の考え、気持ちなどを整理しながら、まとまりのある内容を話すことができる。」とし、令和２年度では「やり取り」，令和３年度では，「発表」に重点を置き，目標達成に向けて指導計画を作成した上で授業を実施した。

(3)　遠隔教育の実際

①令和２年度

Ⅰ　生徒が作成したワークシートをもとにネイティブとのやり取りを実施［資料 1］

何をするにも英語で話す必然性がある環境での言語活動は、生徒にとって大変貴重な英語活用の場となっていた。

［資料 1］ネイティブとのやり取りの様子

Ⅱ　対面授業の効果的な活用

生徒同士でのやり取りにおいては、ネイティブが、マイクを通した生徒の声をすべて正確に聞き取り、適切にサポートすることが難しい場面があるなどの課題が見られたため，生徒同士のやり取りに特に正確性が求められる場面など、単元のねらいに応じて、対面授業を計画的に設定した。

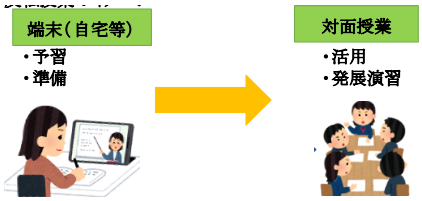
②令和３年度

一人一台端末を効果的に活用しながら「話すこと［発表］」の言語活動の充実を図っていくこととし，Ⅰ～　Ⅲ　に焦点をおいて実践している。

Ⅰ　反転授業の導入［資料２］

端末を使用し、授業内でプレゼンテーション資料を作成しようとすると、話す活動以上に時間を要することがあった。そこで、授業中の「話すこと（発表）」の指導に重点を置けるよう、事前にトピックとルーブリック評価表（［資料３］）を生徒に提示し、「ロイロノート for school」を使って自宅でプレゼンテーションを作成できるようにした。

［資料２　反転授業のイメージ］



Ⅱ　中間指導の充実

中間指導においても必要に応じてロイロノートを活用した。生徒が事前に作成したプレゼンテーションを一度データで提出させ、担当教師がデータ上で中間指導と中間評価を行いフィードバックしている。生徒が、教師からの内容面や正確性についてのアドバイスを事前に確認し、それらを実際の授業で生かせるようにしている。このように中・長期的なスパンの中での中間指導において端末を活用することが、生徒の話す時間の確保だけではなく、話す内容の質の向上にもつながっていると考える。

［資料３　ルーブリック評価表］

Topic		わたしの理想の夏休み	
	知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう態度
A	①want to②because③今までに学習した文法のうち3つを使用している。	①どこに行きたいのか②その理由③したいこと。3つについて話している。	①どこに行きたいのか②その理由③したいこと。3つについて話そうとしている。。
B	①want to②because③今までに学習した文法のうち2つを使用している。	①どこに行きたいのか②その理由③したいこと。2つについて話している。	①どこに行きたいのか②その理由③したいこと。2つについて話そうとしている。
C	①want to②because③今までに学習した文法のうち1つを使用している。	①どこに行きたいのか②その理由③したいこと。1つについて話している。	①どこに行きたいのか②その理由③したいこと。1つについて話そうとしている。

Ⅲ　帯活動の効率化

言語活動を通して使わせたい表現や定着が必要な言語材料を踏まえ、校内教科部で選定したウェブ上のコンテンツを使用し、教師が意図的に作成した選択問題や正誤問題に取り組ませている。生徒たちは端末を活用し、ゲーム感覚で素早く問題を解く。問題を解いた後は、コモンエラーを一度に全員で共有できるため効率的に正確性を身に付けることにつながっている。今後も、「英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」という言語活動の意味を念頭に置きながら，効果的な学習や指導の形態，ICT の活用等を踏まえた生徒たちのより質の高い学びを目指していきたい。

３　研究の成果と課題

(1)　成果

①外部試験（英検 IBA）の結果から

［資料４］で示したように、県教育委員会が県内全中学生に実施している外部試験(英検 IBA)の令和元年度と令和２年度の結果を比較すると、聞く力に伸びがみられる。普段の授業の中で、ネイティブの話を聞いたり、質問を聞いてそれに答えたりする頻度が高くなったことが、聞く力の向上につながっていると考えられる。また、令和２年度アドバンスクラスを選択した生徒の平均は、その年の県平均スコアを 65 ポイントと大きく上回った。このように生徒の英語力の向上につながっていることも遠隔教育の大きな成果のひとつである。

［資料４］　外部試験（英検 IBA）の結果

		令和元年度１年生（133名）	令和2年度１年生（119名）
平均スコア		500	535(+35)
分野別正答率	語彙・熟語・文法	54.7%	57.6%(+2.9)
	読解	48.4%	51.5%(+3.1)
	リスニング	57.1%	70.3%(+13.2)
アドバンスコースの生徒は県平均スコア＋65ポイント			

②生徒の意識調査から（令和２年度アドバンスクラス生徒 37 名に実施）

「遠隔教育は分かりやすかったですか。」という質問に、「分かりやすい」と答えた生徒の割合は 76%、「考えたり，話し合ったりする活動は十分にできましたか。」という質問に、「できた」と答えた生徒の割合は 92%という結果から、生徒たちは英語を使って、自分の考えや思いを伝え合うという言語活動に取り組めたという達成感をもっていることが分かった。また、生徒が興味関心をもちながら学習内容を理解できたことも分かった。アドバンスクラスは、選択制であり、少人数であること、指導者が優れた専門性をもつネイティブであるといった特性が、生徒の質の高い学びにつながったと考える。

(2)　課題

①遠隔授業の授業構成や展開の工夫

少人数であることや指導者が優れた専門性をもつネイティブであるという利点を十分に生かした授業づ

くりをしていく必要がある。ネイティブの質問に対して一問一答で答えたり、ネイティブに質問したりしようとする生徒は見られたが、「コメント」や「質問に答えた上で、話題を広げるために質問し返す」といった、やり取りをさらに深めるための即興性に欠ける部分が見られた。

②指導内容の共有

アドバンスクラスとスタンダードクラスは同じ時間に授業を実施しているため、授業者が相互参観できず、学習の進捗状況や生徒の様子、変容を共有することが難しいという課題があった。

③記録に残す評価場面の設定

習熟度別の指導計画の中に、記録に残す評価をする時間を計画的に設定できなかったために、生徒一人一人の力を見取ることについて不十分であった。今年度は、指導計画の中にパフォーマンス評価をする時間を意図的に位置づけ、一人一人の力を確実に見取れるようにしていく。

第２・３分科会

自分の考えや気持ちを表現する力の育成について

～　Small Talk＋αでの表現活動を生かして　～

茨城県常陸太田市立金砂郷中学校　教諭　横山　聖

１　研究の方針

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）外国語の「話すこと［発表］」の目標には、「(イ）日常的な話題について，事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする」とあり、事実や生徒自身の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある内容として発表できるようになることが求められている。

この目標に対し、本校２年生を対象に行った「話すこと［発表］」に関するパフォーマンステスト（茨城県の観光地紹介）では、話の展開や掘り下げが意識できておらず、単文を組み合わせただけの発表に終始したり、言葉に詰まってしまったりする場面が多く見られた。このことから、本校生徒は、「考えや気持ちを整理して話すこと」、「まとまりのある内容を話すこと」に課題があると考えた。その要因を、既習の知識や表現が生徒の中に十分に習得されていないこと、また、それらを活用しながら理由や根拠とともに自らの意見を述べる経験が不足していることだと考察した。

そこで、本研究では、“Small Talk＋α”に取り組んだ。これは Small Talk 本来のやり取りに、対話を通して発話した内容を自らの中で再構成し、まとまった量で表現するスピーチ活動“＋α”を新たに加えたものである。普段から行っている Small Talk を生かした活動を実践することで、繰り返し活動する中で自分の考えや気持ちを自分の言葉で表現する力が高まっていくとともに、話の展開や構成を常に生徒に意識させることにより、論理的構成及び具体性が高まると考え、本研究主題とした。

２　研究の内容

(1)　研究のスケジュール

５月に行った事前調査と、Small Talk＋αの取り組みを経て実施する第２回、第３回(コロナの影響で未実施)のスピーチ発表について、Content、 Delivery の観点で評価を行い、得点の伸びを比較した。

また、この言語活動を通して、スピーチに必要と思われる基本的な知識や技能の定着を図り、原稿ありきの発表から脱却し、自分の言葉で表現できる力を育成したいと考え、２回、３回とスピーチ発表の回数を重ねるにつれ、原稿づくりは徐々にマッピング程度に抑え、発表は、メモのみでスピーチ発表を行うことを目指した。

【表１　研究スケジュール】

時期	実施内容
５月	第１回 Speech(事前調査) 茨城県の観光地紹介
５月～７月	Small Talk＋α ⇒表３を参照
７月	第２回 Speech 夢の旅行を企画しよう
７月～９月	Small Talk＋α ⇒表３を参照
９月	第３回 Speech※ 茨城マイクロツーリズム

※新型コロナウイルスの蔓延に伴う、臨時休校等の措置により、９月の活動は実施できず。

【表２　スピーチ発表評価の観点について】

Content（思考・判断・表現）	Delivery（知識・技能）
○テーマに対し、自分の考えや気持ちについて、具体例などを出しながら論理的な構成で発表することができる。 ○聞き手の関心や興味を引くもので、独自性や提案性のある内容を発表することができる。	○聞き手に分かりやすい声量、適切なスピードで明瞭に発表できる。 ○正しい英語で、自然な流暢さで発表することができる。 ○聞き手に分かりやすく伝えるために、アイコンタクトやボディランゲージを使用して発表することができる。
・現状分析　・独自性 ・提案性　　・論理的構成	・相手意識　・英語表現 ・プレゼンテーションスキル

・上記の２項目(Content・Delivery)についてそれぞれ ABCD の４段階評価を行う。
（A が４点、B が３点、C が２点、D が１点とする）
・JTE と ALT でそれぞれ評価を行い、その平均値を生徒の得点とし、事前調査と事後調査の得点の推移を比較する。
・ルーブリックは、紙面の都合により省略する。

(2)　Small Talk＋αについて

今回の研究では、１つのトピックを１週間(２～４時間)程度の期間で取り扱うこととした。Small Talk 本来のやりとりに加え、対話を通して発話した内容を自らまとめ、まとまった量(内容)で表現する活動(＋α)を繰り返し行った。また、活動後には中間指導として、知識や表現の確実な定着を図るため、「言いたかったが言えなかった表現」を全体で共有し、生徒は参考になったことや確認した重要表現を Small Talk ノートに書き溜めた。こうしてノートに表現をストックしていき、いつでも既習事項を参照できるようにした。加えて、活動の中で、対話形式では、１つの質問に対して２文以上で答えたり、スピーチ形式では、If や When 節の活用や、There are two reasons.で始めたりすることをタスクとして課し、論理的な構成や具体例の提示などを意識して言語活動に取り組むよう指導した。

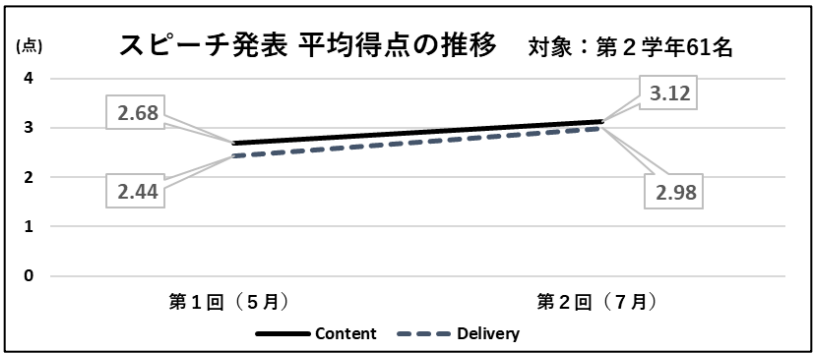
【表３　Small Talk＋α　１週間スケジュール】

Day1	・提示されたトピックについて、教師→生徒でやりとりを行う。 ・その後、生徒↔生徒でやりとりを行う。 ・中間指導(フィードバック)の時間を取り、「言いたかった表現」などを確認、共有する。 ・フィードバックを踏まえてもう一度同じトピックで対話活動に取り組む。
Day2	・Day1 と同じトピックについて、話し手の生徒(A)がスピーチを行う。 ・聞き手の生徒(B)は内容について質問する。（その後、役割を変えて繰り返す） ・中間指導(フィードバック)の時間を取り、「言いたかった表現」などを確認、共有する。 ・フィードバックを踏まえてもう一度同じトピックについてスピーチ活動を行う。
Day3	・パートナーを変えて、Day１の活動を行う。(Day１と同じトピック)
Day4	・パートナーを変えて、Day２の活動を行う。(Day１と同じトピック)

３　研究の成果と課題

(1)　事前調査・事後調査からの分析

Content・Delivery の２つの観点での評価を点数化し、伸びを比較した結果が【図１】である。第２回の発表では、論理的な構成や話の具体性といった点を含む Content の観点において、伸びが見られた(0.44pts)。Delivery についても同様に伸びが見られた。その要因として、発表内容に関する知識や表現の習得が起因したと考えられる。

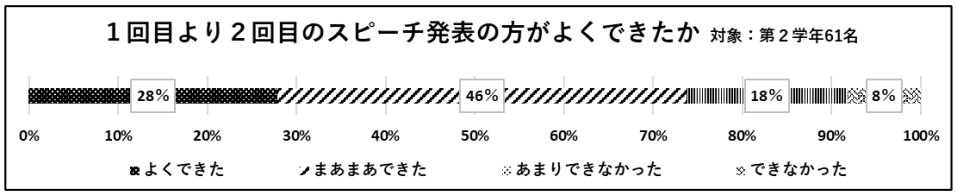


【図１　スピーチ活動 事前・事後調査結果】

このように第２回の発表では、多くの生徒が自分の考えや気持ちを表現することができていたと言える。また、個人内での比較においても、約７割の生徒が前回に比べ得点を伸ばすことができた。

(2)　活動後の自己評価による分析

【図２】は、第２回の発表後に生徒に行ったアンケートの結果である。「前回より今回の方ができたか」という問いに対して74%の生徒が肯定的に回答した。



【図２　生徒アンケート（自己評価）７月実施】

また、その理由として、「Small Talk＋αで学んだ表現を次に活用できた」「原稿を見なくても言いたいことをその場で表現できるようになった」といった回答が挙げられた。これらのことから、Small Talk＋αが、「話すこと［発表］」における自分の考えや気持ちを自分の言葉で表現する力の育成及び論理的構成及び具体性の向上に有効な手立てであると考えられる。

(3)　今後の課題

実際の場面で生きる「話すこと」を充実する上で、「即興でまとまった量の英語を話す力」、「正確な英語を話す力」を意識した活動を今後の授業の中でさらに取り組んでいきたい。Impromptu、 Accuracy といった観点を指導計画や評価の中に常に位置付け、生徒の話す力の更なる向上につなげていきたい。

第４分科会

即興で伝え合う力を育む指導の工夫

授業公開　水戸市立第四中学校

提　　案　高山村立高山中学校

市川三郷町立三珠中学校

昭和町立押原中学校

常総市立水海道中学校

磯前神社神磯鳥居

第４分科会

即興的で伝え合う力を育む指導の工夫

～　話すこと［やり取り］の指導の工夫を通して　～

茨城県水戸市立第四中学校　教諭　蓮見　宏明

１　研究の方針

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編では、「話すこと［やり取り］」は、 今回の改訂で、新たに設定された領域である。」と記載されている。その目標を達成するための重要な条件として、「即興で」が掲げられている。これは、「実際のコミュニケーションの場面においては、情報や考えなどを送り手と受け手が即座にやり取りをすることが多く、英文を頭の中で組み立てる時間を長く取れないからである。」と示されている。

「話すこと［やり取り］」　ア　に「関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。」とある。「『即興で伝え合う』とは、話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備期間を取ることなく、不適切な間を置かずに相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことである。」と書かれているように、本校では授業の中で、即興で話す機会を多く設け、教師主導の授業ではなく、あくまでも教師はファシリテーターやコーディネーターとして、生徒中心の授業が展開できるようなコミュニケーション活動の工夫をした。

２　研究の内容

(1)　帯活動の充実

本校では即興を重視した活動の充実という観点から、帯活動に継続して取り組んだ。全学年で力を入れて毎時間取り組み、発話時間の確保に努めた。

①QA Time

本活動は、授業の最初の時間を使い、各単元の新出表現及び既習表現を用いて、QA をする活動である。年度当初に、コミュニケーションをとる時には、R(Reaction)C(Comment)Q(Question)を大切にするということを伝えた。また、単なる QA にならないように QAA、QAAQ の形で会話をするなど段階的に指導を行った。生徒は相手の意見にコメントをしたり、あいづちをしたりして会話を継続させる工夫をすることで、より自然な形でコミュニケーションが取れるようになった。

②３-Hint-Quiz

指定された英単語を３文のヒントで伝える活動である。既習事項を用いながら、相手に伝わるように説明することで生徒自身の表現力の向上につながった。

(2)　中間指導の充実

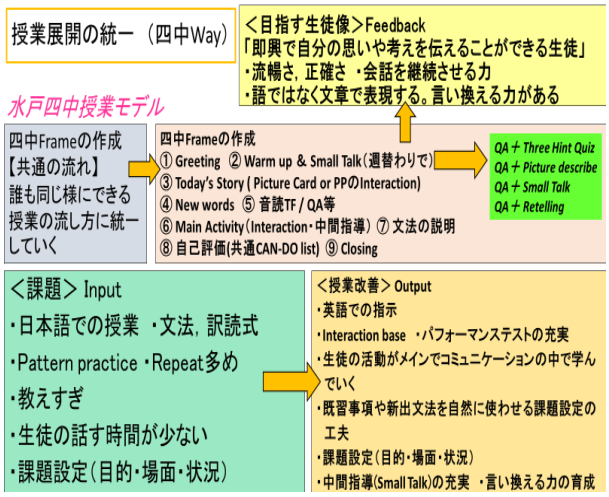
Small Talk をより充実したものにするために、中間指導の工夫をした。Any questions? で始めるのではなく、疑問点はまず生徒が考え、次に、相互に疑問を解決する機会を設けることで、生徒中心の活動とすることができた。また、質問内容が精選され、次の活動につながるような中間指導をすることができた。質問内容の精選に伴い、難しい質問が挙がることがあり、中学校の学習内容を超える表現も必要になったことから、言いたい表現をどのように既習事項に言い換えて生徒に教えるかという教師側のリフレーズやパラフレーズの機会が増えた。教師自身が簡単な表現で言い換えるモデルを示すことで、生徒にも難しい表現は言い換えるという意識付けをすることができた。さらには、Small Talk を継続して行うために、トピックの年間計画を作成した。生徒にとって身近な話題で毎月４～５程度のトピックを設定した。中間指導の際には、Small Talk ノートを用いることで、生徒が使用する表現として蓄積し、表現力の向上につながった。

(3)　CAN-DO リスト（自己評価カード）の活用、目的・場面・状況などの設定の工夫

授業の最初の時間には、CAN-DO リストを活用し、本時の目標や活動内容を確認し授業に臨んだ。生徒はその時間にやらなければならないことや評価について事前に確認することで、意欲的に活動することができた。また、CAN-DO リスト（自己評価カード）では、毎時間、目的・場面・状況などを意識した課題の設定をした。それにより、生徒は、伝える目的や相手意識、さらには、言語の使用場面や状況を意識することができ、即興で既習事項や新出表現を用いながら適切な英語で会話することができた。

(4)　授業展開の統一(四中 Way)

本校は生徒数 900 名超の大規模校であり、授業を担当する教員が毎年変わる傾向にある。そのため、学年が上がっても生徒に即興で会話する機会を多く与えるために、 英語部員が統一して授業を進めるように努めた。統一した授業展開により、前年度までの活動や学習の積み上げを継続することができた。特に、第３学年では、既習事項を用いながら流暢に話すことができる生徒が増えた。また、主体的に学習に取り組む生徒が多く、パフォーマンステスト等では高い評価を得る生徒が学年を重ねるごとに増えた。どの教員も同じ方法で取り組んできた成果であると考える。



３　研究の成果と課題

多くの生徒は英語を使って自分の思いや考えを伝え合うことができた。１分間以上継続して話すこと［やり取り］ができる生徒の割合は、４月は 48.7%であったが、７月は 80.6%であった。(AET 評価)

令和３年度実施の「全国学力・学習状況調査」の［生徒質問紙］の質問番号 (62)「１、２年生のときに受けた英語の授業では、英語で話したり書いたりして、自分の考えや気持ちを伝え合うことができた。」の質問に対して、「１．当てはまる」を選んだ生徒は全国平均よりも 6.6%上回った。これまでの授業の中で、自分の思いや気持ちを伝え合う活動を、帯活動の工夫とともに、Small Talk の継続、目的・場面・状況などの設定を意識し進めてきた成果と言える。

パフォーマンステストにおいては、生徒がＡ評価を目指すには、正確性も必要とされる。しかし、クラスのほとんどの生徒がＡ評価まで届いていないことが課題となっている。今後も正確性を高める指導をしていく必要がある。そのため、正確性の育成に関しては、会話の継続に加えて、 インプット活動も十分に行いたい。インプット活動の充実は、アウトプット活動をする際に非常に有効と考えられる。また、生徒の発言を事前に十分に予測し、生徒に使わせたい表現を、単元の中で、計画的に指導していくことで発話の充実につなげたい。さらには、やり取りの中で、語彙指導を効果的に行い、正確な英語に触れる場面を多く取り入れたい。最後に、技能統合の観点では、生徒自身が言えたことを書く活動につなげることで、正確性が高まると考える。即興性を高める指導を続けながら、正確性を高めることにも見通しをもち授業や単元の計画をしていきたい。

パフォーマンステストのルーブリック

パフォーマンステストふり返りカード

Class (　) No (　) Name(　　)

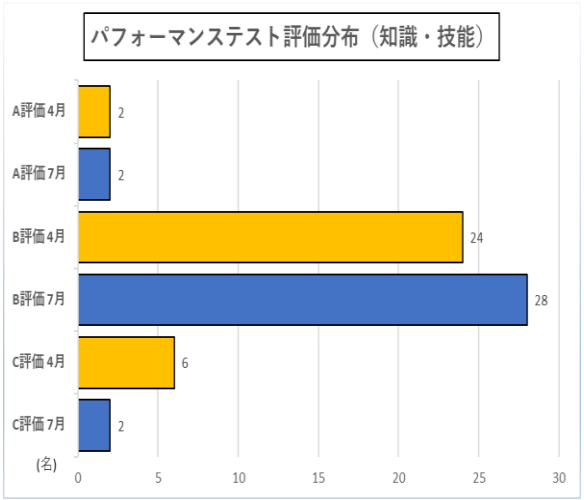
パフォーマンステストについて
以下の条件で話を継続してください。

条件１　話題に対して習った表現を使って話をしている
条件２　自分の考えたことを話している
条件３　相手に質問をしたり，話題を深めたりして対話を継続している

ジェイコブ先生の友人の Mike が夏休みに日本に遊びにくることになりました。日本に滞在中に楽しんでもらうために，どこに案内したらよいでしょうか。ぴったりのプランを考えましょう。なお，Mike は初めて日本に来日します。

	知識・技能（正確さ）	思考・判断・表現（適切さ）	主体的に学習に取り組む態度
A	発音や，アクセント，目線，声量，リアクションなどに気を付けながら，誤りのない正しい英文で話すことができる。	質問に沿って自分の考えを詳しく述べたり，相手に質問したりして３つの条件を満たしてやり取りしている。	質問に沿って自分の考えを詳しく述べたり，相手に質問したりして３つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
B	発音や，アクセント，目線，声量などに気を付けながら，コミュニケーションをとることができる英文を用いて話すことができる。	３つの条件を満たしてやり取りをしている。	３つの条件を満たしてやり取りをしようとしている。
C	「B」を満たしていない	「B」を満たしていない	「B」を満たしていない

パフォーマンステスト 令和３年度 ３年７組（３２人）の変容



第４分科会

即興的で伝え合う力を育む指導の工夫

～　伝え合う力を育むための段階的な指導等の工夫を通して　～

長野県高山村立高山中学校　教諭　片桐　園子

１　研究の方針

研究のテーマ

「自分の思いや気持ちを即興で伝え合う力を養うためのコミュニケーションを行う目的や場面、状況などを位置付けた学習活動の設定や、段階的な指導等の工夫はどうあるべきか」

一村一校と恵まれた環境下であるがゆえに、幼少期からほぼ変わらないメンバーで生活している。互いに関する多くのことを理解していることから、伝え合う必要性を感じる機会が少なく、コミュニケーションへの意欲も生まれにくい。発表の場面では代表的な生徒に任せてしまいがちな部分を課題と感じている生徒も多い。中には、新しく出会った教師や仲間とどう関わったらよいか、自己表現の仕方はどうあるべきか模索している生徒もいる。

そこで、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを位置付けた学習活動の設定や段階的な指導等を工夫する」ことで「相手意識や自信をもって表現力豊かに発信し、受容する力をつける」ことを目指して研究を進めている。

２　研究の内容

(1)　自分の思いや気持ちを即興で伝え合う力を養うためのコミュニケーションを行う目的や場面、状況などを位置付けた学習活動の設定と帯活動の充実

①相手意識が高まる学習活動

昨年度は「世界への思いやりメッセージプロジェクト」を有志で立ち上げ、様々な言語やイラストでそれぞれの思いをカードに託し、グリーティングカード作りを通して、世界へメッセージを発信する機会を設けた。新しい仲間との出会いに意欲的に取り組んでくれたのが、現在の３年生である。

今年度の授業では、これまで出会ったことのない新しい仲間や自分たちとは異なる環境で暮らす人々との出会いを通して、生徒が英語を通して相手に自分の意思を伝えたり、自己表現することを求められた際に自分自身の考えや気持ちを発信したりすることを通して、英語学習への関心を高め、価値観の違いに気づき、多様な生き方や柔軟性を身に付けることができるようにしたいと考えている。

そこで、コロナ禍で直接的な交流が難しいこともあり、海外とのオンライン交流を授業に取り入れることにした。相手意識をもって、英語で自分の思いや気持ちを即興で伝え合うことができる生徒の育成を目指して、今年度の各単元に言語活動を位置付けている。

資料１　言語活動に取り組む生徒

(2)　自分の思いや気持ちを即興で伝え合う力を養うための段階的な指導

①オーストラリアの小学生との交流活動から韓国の中学生との交流活動に向けて

１学期にオーストラリアの小学生（６年生）と Web 交流を行った。これまでほぼ同世代の海外に住む子ども達と英語での会話をしたことがなかったため、多くの刺激を受けた生徒が多い。オーストラリアの子ども達は、明るくて反応のよい子が多く、元気に交流をしてくれた。交流を通して、海外の児童・生徒と交流したり、コミュニケーションをとる際には、はっきり話したりイントネーションをつけて話したりすることが大切だということを生徒達は実感した。

交流活動の事前指導としては、どのような交流を行いたいか生徒と確認し合い、コミュニケーションに不安を抱える生徒であっても、英語を使用して取り組むことに挑戦しようと思えるように支援した。

【 交流への目的意識(どのような目的を持って取り組むか) 】

目的〈オンライン交流のポイント〉

・必要なことを知る　・メモなしで思い切って質問する　・本物の英語に触れてみたい

・習ったことを生かす　・伝わるように話す

互いの願いを共通のものとすることで、生徒たちの交流活動への意欲は増したように感じる。交流活動後には、次のような振り返りがあった。

【 交流を通した生徒の気づき(発音・会話の速さ・イントネーションなど含む) 】

・会話が途切れがちで教師の支援が必要だった⇒相づちや質問などで会話を継続・発展させたい

・英語らしい発音の違いや音のつながり　・気持ちを込めて伝える必要性

② 教科書のトピックとの関連（Japan for Foreign Perspective ～海外から見た日本～）

NEW CROWN BOOK3　Lesson 4 “The World’s Manga and Anime”では、文化の違いを超えて調整していくことについて考える力を養うための題材として、海外における日本の漫画やアニメが取り上げられている。漫画やアニメは生徒にとって身近なものであり、自己紹介の内容にも取り入れやすいメリットがある。

③ オーストラリアの小学生との交流活動から韓国の中学生との交流活動に向けて

２回目の交流となる２学期の活動として、生徒の多くが K-POP 等に慣れ親しんでいることから、生徒の興味・関心が高いと思われる韓国の中学生との交流を計画した。韓国の文化に触れてみたいという強い思いをもつ生徒もおり、生徒達は新たな出会いに向けて大きな期待と少々の不安を抱いている。

２学期中旬には、交流の前段階として、長野県で ALT をした経験をもつ韓国在住のアメリカ人教師との Web 交流を行った。

３　研究の成果と課題

(1)　学びの姿の変容

即興で伝え合う学習活動を段階的に行ってきた成果として、次のような学びの姿の変容が挙げられる。

【自信をもって会話を継続・発展できるようになってきたＡ生の姿】

１学期　・用意した原稿を読んで伝える　・不安な様子で、会話が途絶えると教師を見る

・声量やイントネーション、伝えたい内容にあまり着目できずに話す

２学期　・原稿を読むのではなく、相手の顔を見ながら話す　・困っている友だちを支援しつつ、一緒に話す

・質問や相づちをすることで会話を継続させようとする

【生活様式や文化的な背景の共通点や相違点を意識したＢ生の気づきや学習カードへの記述】

１学期　「日本的な発想や日本語的な発音だとよく伝わらないことがある。『たい焼き』について説明するときに “It’s fish.”だけでは、よく伝わらなかった。“It’s a fish-shaped pancake.”と答えればよかったと知った。」

２学期　「韓国の中学生と会話するときには、K-POP など共通の話題もあるけれど、日本と韓国の違いを意識して会話しよう。」

資料 2　たい焼きの写真を見せて説明する生徒

伝え合う必要性を感じ、既習事項を駆使して英語でコミュニケーションしようとする生徒の姿が増えてきた。今後も、会話を継続・発展させ、できるだけ個々で伝え合う場を設けていきたい。

(2)　２学期後半の交流活動に向けて

異文化交流を通して、英語の必要感や自己肯定感を高め、高山村で生まれ育った仲間と共に、世界の仲間との関係を自他共に肯定的に受け入れる経験を積ませていきたい。また、グローバル社会においての多様性を受け入れる素地を養うことを目指して、言葉や文化の壁を乗り越えられるよう日本と韓国の中学生をつなげていきたい。

第４分科会

即興で伝え合う力を育む指導の工夫

～「やりとり」の活動を通して～

市川三郷町立三珠中学校　　教諭　小林　雄飛

１．主題設定の理由

新学習指導要領が全面実施となり、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実を図ることが明示された。これまでの４つの領域の１つ「話す」が２つに分かれ、「聞く」「読む」「話す〔やりとり〕「話す〔発表〕「書く」の５つの領域で目標が設定され、互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動がいっそう重視されることとなった。そして、その目標を達成するための重要な条件として「即興で」が掲げられた。

私の地区の研究会では、研究主題を「楽しい授業、分かる授業の創造　～力のつく授業を目指して　即興的なやりとりを取り入れた授業の工夫～」とし、地区全体で同じテーマの下、研究を進めている。コロナ禍の中、十分に研究の場を持てず、新たに設定された領域について研究はまだ道半ばではある。この場での提案を通して多くの示唆をいただき、今後の研究に生かしたい。

昨年度山梨で開催される予定だった「第 44 回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会山梨大会」が、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となった。本提案は、その場で「即興的なやりとりを取り入れた授業の工夫」をテーマに、授業とともに提案する予定だったものである。

２．研究の内容

（１）「即興力」のとらえ

①　地区として考える「即興力」

「瞬時に情報処理し、自ら持つ知識技能をいかし、反応したり発信したりする力」と定義

②　情報処理の構成要素

Ⅰ　スピード…（　相手の発言を理解したり自分の考えを発信したりする速さ　）

Ⅱ　瞬発力…（　素早く判断し、即座に表現できる力　）

Ⅲ　知識の自動化…（　意識をしなくても自然と口に出せる力　）

Ⅳ　場面に応じた表現の取捨選択

③　「即興力を育てるための活動」に含まれる要素として考えたこと

Ⅰ　既習事項を繰り返し、できれば異なる場面で用いることができること

Ⅱ　場面・話題設定が明確にされ、身近で関心のある題材であること

Ⅲ　会話を継続することにつながる活動であること

Ⅳ　小学校での学びを中学校での学習につなげる活動であること

④　即興力育成のために必要であると考える方策・留意点

Ⅰ　１年次より、継続的に話す活動に取り組ませること

Ⅱ　意味のある文脈で既習の（理解可能な）語句表現などに繰り返し触れさせること

Ⅲ　４技能を統合的に用いた活動を継続すること

Ⅳ　誤りや不安感等の情意フィルターを軽減させること

Ⅴ　文法や単語等、知識を与える学習を適宜入れながら適切に指導を行うこと

Ⅵ　教科書を利用した課題設定をすること

Ⅶ　Classroom English や定型文、問い返しなど会話を継続させる指導を工夫すること

Ⅷ　Recast 等の教師側の誤り訂正への支援の方法を工夫すること

（２）授業での実践例

【実践例１】スモールトークでのやりとり

①　場面

Ⅰ　帯活動でウォームアップとして

Ⅱ　復習として

Ⅲ　授業や単元の終わりのまとめとして

②　内容や話題

Ⅰ　関心のある事柄

Ⅱ　日常的な話題

Ⅲ　社会的な話題

Ⅳ　教科書内容に関わる内容

③　方法

Ⅰ　相手の発言に対して的確に応じて会話を発展・継続させていく力を養うために、相づちや聞き返し、問い返しなど、決まった言葉やセットフレーズの指導、定着

Ⅱ　目的意識を持たせ、相手の発言やテーマに関して自分の考えを伝える力の育成

Ⅲ　繰り返し行うことによる fluency の育成

Ⅳ　教師が recast を行うことや生徒からの elicit による気づきを通した修正、改善

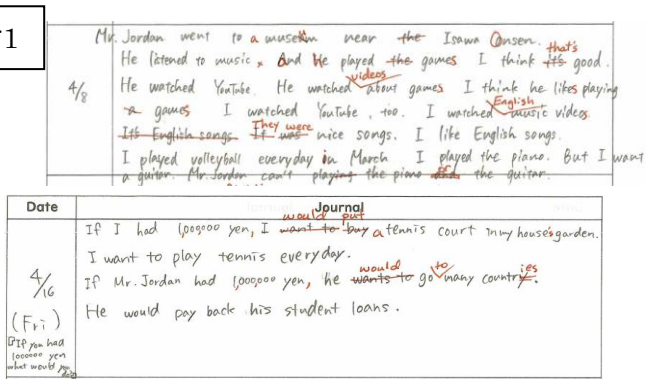
Ⅴ　CAN-DO ではなく CAN’T-DO の体験

Ⅵ　CAN’T-DO への振り返りや指導による accuracy の育成

Ⅶ　指導事項の定着をはかるための活動→指導→活動のサイクル

Ⅷ　より accuracy を高めることをねらいとして行うサマリーライティング*1

*1



【実践例２】展開の中の言語活動としてのやりとり

①　場面

Ⅰ　教科書内容の Oral interaction として

Ⅱ　言語材料の Oral introduction として

Ⅲ　授業や単元のまとめとして

②　方法

Ⅰ　「何ができるようになるか」を明確にしたゴール・ねらいの設定（卒業時・学年末・学期末・単元末）

Ⅱ　単元ごとのルーブリック評価表*2 を用いた評価基準の作成

Ⅲ　バックワードデザインに基づいた授業計画*3

Ⅳ　授業計画に組み込むステップを踏んだ「やりとり」の指導計画（含帯活動）

*2

★経験やおすすめについて意見をやりとりすることができる！

	A	B	C
内容（思考判断表現）	課題や相手の発言に沿った内容であり自分の意見が含まれている	課題に沿った内容である	課題に沿った内容でない
英語表現（知識技能）	記事を理解しており、文法や語彙等が適切である	記事を理解しているが、語彙に多少誤りがある	記事を理解していないか、文法に誤りがある
充実度（主体性）	相手に配慮し相互理解ができる表現を使い、会話を途切れさせない努力をしている	聞き手に配慮し自分の意見を理解してもらいやすい表現を使う努力をしている	会話に消極的で、かかわるための努力をしていない

*3

３．研究の成果と課題

根気強く継続して即興的なやりとりを授業に取り入れることにより、生徒の学びに向かう姿勢が向上し、間違いを恐れず自分の気持ちを多く表現しようとする姿勢が多く見られるようになった。英語を「かたまり」としてとらえ、使えるようになった表現も増え、知識の自動化が進んだ様子も見受けられる。

しかし、課題も山積している。上記にあるように長い時間と根気が必要で、成果も一朝一夕では見えず、現れるまでは時間がかかる。また、生徒によっては、間違いを恐れない反面、適切な指導がなければ Accuracy が疎かになり、間違いが定着してしまう危惧もある。

即興的なやりとりの評価への課題も完全には解決できていない。例えば、ルーブリック評価表を用いて日頃の指導を進めているうちに、異なるより適切なゴールが見えてくることも多々ある。ゴールやねらいをより明確にするための事前の教材研究が必要であることを痛感する。

第４分科会

「即興」への挑戦

～繰り返しの学習で身につけたい「やり取り」の力～

山梨県昭和町立押原中学校　　教諭　清水　浩平

１　研究の方針

本校は山梨県英語教育改善プラン推進事業　の研究指定を受けており，令和３年度は２年目の研究年度である。研究の柱は①「話すこと[やり取り]」②言語活動の充実③パフォーマンス評価（言語活動での中間指導）の三つである。

今回の第 45 回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会茨城大会の分科会における提案発表テーマ「即興で伝え合う力を育む指導の工夫」と，改善プランの中で私自身が取り組んでいることを併せて紹介させていただきたい。

私が考える研究仮説は『生徒に「繰り返し（スパイラル学習）による豊富なインプット」を与えることで，即興でのやり取りが可能になるだろう。』ということである。即興でのやり取りをするためには生徒がその場で「伝えたい」「たずねたい」と思うことを考え，それを英語で表現しなければならない。しかしまずは生徒の中に「話題」に関する情報がたくさんある，あるいはそれを表現するための語彙や文法事項の知識があるというのが前提である。

授業において，英語の使用場面をできるだけ多くすること，それを何度も繰り返すことを意識した授業設計を行ってきた。

「どこで」繰り返すか考えたときには「50 分間の授業の中で」「一つの単元の中で」「年間指導計画の中で」繰り返すことを考えた。また「何を」繰り返すか考えたときには大きく分けて①目標言語材料の習得・言語活動②教科書の題材学習③学んだことを活用するコミュニケーション活動の三つを授業で行っていく必要があると考えた。

私は 50 分の授業を上記の①+③，②+③というセットで構成することが多い。そのため今回の提案は一つの授業，一つの指導案から授業を考えるのではなく，それぞれの授業の中で「どのように」繰り返し学習させているのかという点に焦点を当てた提案として見ていただきたい。

２　研究の内容

(1)　Small Talk

山梨県での研修等でも提唱されているのが Small Talk である。この活動では前提として内容の伝え合いを重視し，その中で必要な指導（活動を通して指導）を行うことがポイントとして挙げられている。その中で，①内容重視…身近な話題の中で，自分自身の考えや気持ちなどを伝え合わせる。教師も自分自身のことを英語で伝える。やり取りを楽しむ。②対話の継続…対話を継続することができるような表現を段階的に使わせていく。③既習表現の活用…伝えたいことを伝えることができるよう，既習表現を想起させる指導を行う。④指導過程…「活動→指導→活動」で指導。⑤指導観…指導の成果が出てくるのには時間がかかることを理解して指導。フォーマットを暗記させるなど，その場限りのパフォーマンスを求める指導はしない。

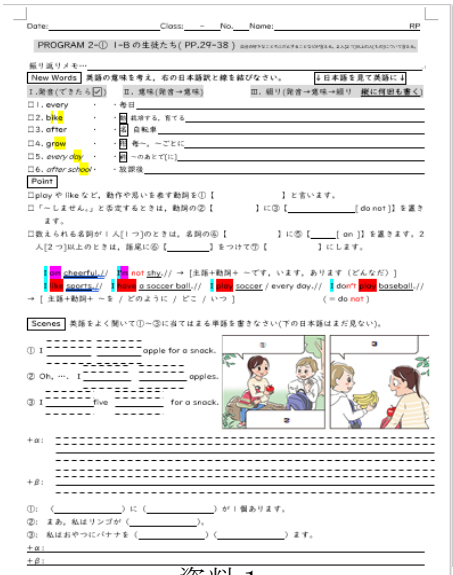
といったことを教師が意識して授業を行うことが重要である。特に④については共通事項として Ⅰ Interactive Teacher Talk　Ⅱ S-S interaction 1　Ⅲ Sharing　Ⅳ S-S interaction 2 という流れも共有されており，私もその形にできる限り近づけて Small Talk を行っている。どんな話題で話をするか考えるのは大変だが，「今から Small Talk をやりましょう！」という感じではなく，授業の中で生徒と英語でおしゃべりする，くらいの気持ちで活動を行うのが良いのではないか，と思うようになってからは私自身のこの活動へのハードルも低くなってきているように思う。

(2)　教科書の題材学習

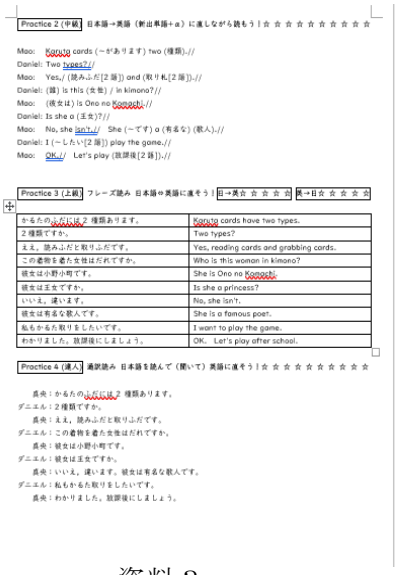
Sunshine English Course（以下 Sunshine）は[Scenes]という短い対話文がついている。昨年度ま

での Sunshine で Basic Dialog と呼ばれていたものに２コマの絵がついたものである。この画像，あるいは動画を用いて導入をする。新出単語の確認をした後，ディクテーションややり取りも資料１を用いて行う。ここまでは Sunshine の単元の中では前半部分である。教科書本文[Think]についても同様に口頭で導入したり，やり取りをしたりした後，資料２での事実発問や推論発問，評価発問を組み合わせながら内容理解の確認を行う。

音読指導も繰り返し，形式を変えて行う。資料２の下にあるように，声に出して英語らしく読めるように練習をしたり，資料３を活用して日本語と英語を組み合わせながら音読したりする。


資料１

資料２


資料３

(3)　学んだことを活用するコミュニケーション活動

この点に関しては動画を参照していただきたい。パフォーマンステストについては適切な課題となっているのかどうかを再考する必要があると強く感じる。また知識・技能や思考力・判断力・表現力の育成という面で課題は多いが，中学１年生の初期の段階で自分の持つ力を駆使して会話を続けようとする，動画のような生徒を育成していきたい。

３　研究の成果と課題

授業の進み方，使用するワークシートの形式をある程度統一したことにより，指示・説明が簡潔になり，生徒の活動時間も確保できるようになってきたように感じる。これは「繰り返し」の成果の一つであるとも考えられる。新学習指導要領で話すことが二つに分かれたことにより，どのように授業を進めていけばよいのか悩んだが，現在は Small Talk を軸にしながら「やり取り」を授業に取り入れることを前向きに考えて授業設計ができている。

「繰り返す」というと「同じことを何度も行う」ようだが，実際には形を少しずつ変えながら，生徒が飽きないように工夫をしている，という感覚がある。テンポよく授業を進めて「もう授業終わり？」と生徒がつぶやくような授業を目指したい。

課題としては(3)で前述したように「適切なパフォーマンステスト（単元のゴールとしての活動）の設定」はもちろん「言語活動の充実」「評価」など，数多く挙げられる。あるいは Small Talk でやり取りをした際の accuracy⇔fluency, recast, elicit, feedback など，教師としての指導力に磨きをかける必要性を強く感じる。活動をする生徒の姿をどれだけ具体的にイメージしながら教材研究・準備ができるかによって，授業の質は変わってくる。授業の基本は readiness であると言われるが，これは教師にとっても，生徒にとっても大切なことである。これから数多くの授業を積み重ねていき，課題を一つずつ解決していきたい。そのために多くの先生方からのご示唆をいただきながら，自分自身，学び続ける英語教師でありたい。

第４分科会

互いの考えや気持ちを即興で伝え合う力を育む指導の工夫

～　第３学年における言語活動の工夫とＳＤＧｓに関連づけた単元指導を通して　～

茨城県常総市立水海道中学校　教諭　森　　恵

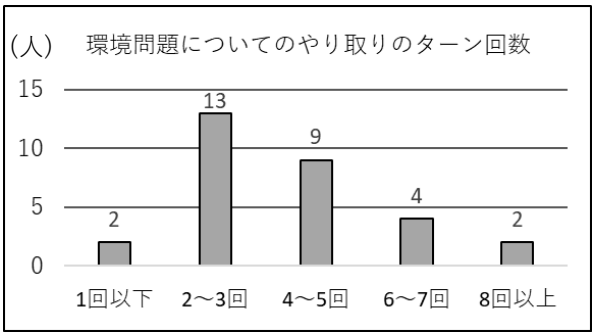
１　研究の方針

(1)　研究の指針

「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編」では、「２　外国語科改訂の趣旨と要点」について、「互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から，「話すこと［やり取り］」の領域を設定するとともに，言語の使用場面や言語の働きを適切に取り上げ，語，文法事項などの言語材料と言語活動とを効果的に関連付けて指導することとするなどの改善・充実を図った。」とある。また、育成を目指す資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力，判断力，表現力等」及び「学びに向かう力，人間性等」のそれぞれに関わる目標の一つとして、「(2)　コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，日常的な話題や社会的な話題について，外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり，これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。」と示されている。単に、受け手となったり送り手となったりする単方向のコミュニケーションだけでなく「伝え合う」という双方向のコミュニケーションを図る資質・能力の向上が今まで以上に重視されている。

(2)　生徒の実態

本校の生徒の実態は、全体的に英語学習への関心・意欲が高い。生徒の対話活動への取り組み状況からは、部活動や音楽といった「関心のある事柄」や「日常的な話題」について、即興で情報を交換しながら対話を継続させたりすることはできている。しかし、エネルギー問題、環境問題や平和に関する内容といった「社会的な話題」について４人グループで３分間のやり取りの様子を調査した結果、考えたことや感じたこと、その理由などを述べ合うことに対してはやり取りのターン回数が少なく、対話を継続することは困難であることがわかった（図１）。



【図１　社会的な話題のやり取りのターン回数】
（R2.6.26 実施　水海道中学校３年３組 30 人）

(3)　研究テーマに迫るための手立て

(2)に示した生徒の実態から、「社会的な話題」についての考えや気持ちを即興で伝え合う力を身に付けさせたいと考えた。本研究ではその力を、「社会的な話題」について伝え合う言語的な知識・技能と、社会的な事象に関して思考し自分の意見を生み出す力と捉え、それらの育成を目指す。そこで、言語活動の工夫とＳＤＧｓに関連づけた単元指導を通して互いの考えや気持ちを即興で伝え合う力を育むことができるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

２　研究の内容

(1)　「社会的な話題」について互いの考えや気持ちを即興で伝え合う力を育む言語活動の工夫

「社会的な話題」について意見を交わす言語活動を毎時間の授業に取り入れた。本活動は、授業の導入として行ったり、またはまとめの活動として行ったりするなど、授業内容に合わせて最も効果的な指導過程となるよう配慮し、毎時の授業に取り入れた。

また、図２の①～⑥の流れをパターン化して行った。難しい話題

① Think-Pair-Share
⇓
② Show a model
（Interactive Teacher Talk）
⇓
③ Talk in Group 1
⇓
④ Feedback
⇓
⑤ Talk in Group 2
⇓
⑥ Write Opinions

【図２　毎時間行った言語活動の流れ】

であっても繰り返し同じ話題について対話することで、使用語彙やその話題に特有の表現などを定着させるだけでなく、その話題について多面的、多角的な視点を得ることで、自分の意見や考えについて簡単なやり取りが即興でできるようになると考えた。

①Think-Pair-Share

まず、話題に対して自分の意見を１分間で考えさせる。次に、その内容を隣の生徒と英語で話し合わせる。その様子を教師が観察し、１分間の対話の後、特に良い意見を述べていた生徒や共有したい表現を用いていた生徒を数名指名し発表させる。この流れを習慣化することで、言語的な知識や社会的事象を捉えるための視点に対する気付きを与えた。

②Show a model（Interactive Teacher Talk）

同じ話題についてＪＴＥとＡＬＴでやり取りを行って模範を示す。その際、①での生徒の状況を振り返り、対話を継続・発展させるために必要な「聞き返し」や「相づち」、「関連する質問」などを含めたモデルを示す。さらに、教科書本文で使用されている既習の言語材料を意図的に使用し、生徒にも使用を促す。

③Talk in Group 1

４人のグループで３分間対話させる。スタートと同時に“Let’s talk about ---.”と始め、話しの切り出し方をパターン化し、会話の円滑な進行を促す。②で示したモデルを参考に対話を継続させる。

【資料１　やり取りの様子】

④Feedback

③を観察して分かったことを学級全体にフィードバックする。その際、下の３点のフィードバック方法を適宜使い分けて、対話を発展させようとする生徒の意欲を高める。

ア　Praise（良かった点を称賛する）

イ　Error Correction（間違いを訂正する）

ウ　New Words and Phrases（会話を発展させるために必要な言語材料を与える）

⑤Talk in Group 2

同じ４人のグループで、再度、同じ話題について３分間の対話を行う。

⑥Write Opinions

話題について自分の意見を整理して書かせ、必要な言語材料の定着を促す。また、生徒が書いたものを添削し、次の言語活動で再度使用させ表現の正確性を高める。

(2)　ＳＤＧｓと関連付けた単元指導

持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ：Sustainable Development Goals）は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」における、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。17 のゴール・169 のターゲットから構成され、発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいる。年度始めに行った実態調査において、ＳＤＧｓという言葉を知っていると応えた生徒は９割を超えていた。しかし、その内容について具体的に理解していると回答した生徒は１割に満たなかった。

このような実態から、教科書と関連付けて学習することで、生徒は、社会や世界、他者との関わりに着目して物事を捉え、自分の考えをもってやり取りを発展・継続させることにつながると考えた。

①指導過程の工夫

Ⅰ　ＳＤＧｓ導入の工夫

ＳＤＧｓに対する生徒の理解を深めるために、図３の国連のサイトで紹介されている「Go Goals!」すごろくゲーム（図３）を行った。色が塗られた目で止まった生徒はカードを引いて、その質問に対して答

【図３　すごろくゲーム】

えを述べなくてはならない。このカードに難しい単語がある場合は、カードの裏に印刷した日本語を参考にするよう指示した。ゲームを通して生徒たちは、他の生徒が読み上げた内容を聞いたり、カードを読んだりしてＳＤＧｓについての情報を得た。ゲームのまとめとして、考えたことや感じたこと、その理由などをグループ内で英語で述べ合った。

Ⅱ　教科書単元との関連付け

New Horizon English Course 3 の各 Unit から学んだことと結び付けながら、各単元と 17 のゴールを下の表のように関連付け、自分の考えや感じたこと、その理由などを友達と伝え合ったり、文章にまとめたりした。

【表１　New Horizon English Course 3 各 Unit と授業内の対話の話題】

教　科　書　の　単　元	授業内の対話の話題
Unit 2 From the Other Side of the Earth 題材：アマゾン川と熱帯雨林の恩恵と環境問題	
Unit 3 Fair Trade Event 題材：フェアトレードのしくみと意義	
Let's Read 1 A Mother's Lullaby	
Unit 4 To Our Future Generations 題材：災害への備えと未来へ伝える大切さ	
Unit 5 Living with Robots-For or Against 題材：ロボットの進化と普及の利点と問題点	
Unit 6 Striving for a Better World 題材：アウンサンスーチーの半生と信念	

②単元指導の終末活動の工夫

表１の各単元の終末には⑴で示した対話活動時間を４分に延ばし、学級内で発表会を行ってきた。そして１年間のまとめの活動として、最終単元終了後には、ALT８人と教室をオンラインでつないだパビリオン形式の授業を実施した。『Let's enjoy conversations and share your ideas and feelings!』という目標のもと、図４の流れで授業を行った。生徒は初めて出会う ALT と即興で会話を行った。

生徒は３人のグループに分かれ、それぞれのグループで、タブレットを使い、ALT 派遣会社に所属する茨城県内の８名の ALT とオンラインで交流した。会話の話題は「関心のある事柄」、「日常的な会話」、「社会的な話題」と段階的に難易度を上げ、５つの対話活動を行った。より多くの ALT と会話ができるように、対話活動ごとに異なる複数の ALT と交流し、会話をした。

1. Greeting
2. Sing a song
3. Warm up
4. Enjoy Conversation
   1st Topic: Hobbies →Feedback
   2nd Topic: Hobbies →Feedback
   3rd Topic: What are good points of your country?
   4th Topic: What are good points of your country?
   5th Topic: Read the passage about SDGs and share ideas.
5. Conclusion

【図４　ALT とのパビリオン形式の授業の内容】

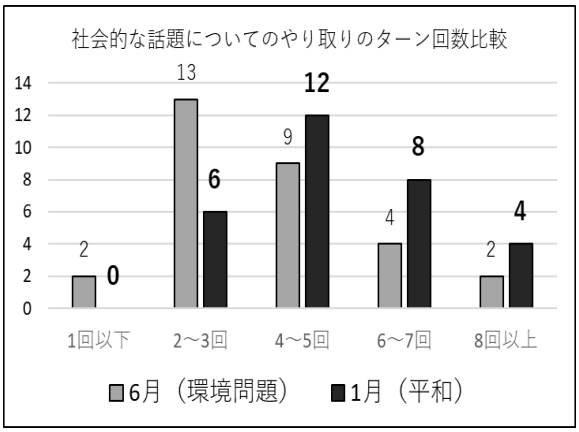
【資料２　ALT とのパビリオン形式での授業の様子】

３　研究の成果と課題

(1)　研究の成果

①社会的な話題についてのやり取りのターン数の比較から

図５の実態調査から、６月のターン数より１月のターン数が増えた。即興性のある言語活動を続けていくことによって、生徒の英語力が向上し，会話を続けることができるようになったことがうかがえる。また、相手を気遣ったやり取りも見られるようになってきた。



【図５　やり取りのターン回数の比較】
（R3.1.15 実施　水海道中学校３年３組 30 人）

②抽出グループのやり取りの内容から

図６からは、自ら話を切り出したり，相手に聞き返したりするなど積極的に対話を継続しようとする姿が見えた。

生徒:　Let’s talk about SDGs.
ALT:　OK. Let’s talk about SDGs.
生徒:　Yes.
ALT:　What is SDGs?
生徒:　SDG is Sustainable development goals.
ALT:　OK, and what does it mean?
生徒:　Pardon？
ALT:　What does it mean?　Why do we need it?
生徒:　Because SDGs are very important problem.
ALT:　OK. So are you saying that we need change?
生徒:　Yes. So I can support No.1, no poverty.
ALT:　Oh, end poverty? No.1.
生徒:　Yes.
ALT:　Why do you support No.1?
生徒:　Because if I buy fair trade products, more money goes to the workers.
ALT:　More products go to the workers?
生徒:　Yes.　So poor people is small.
ALT:　So if you give more money to the workers, won’t the products, for example, our smartphone won’t it be more expensive?　And then, maybe, you can’t buy smartphone because it’s too much money.
生徒:　But fair trade product is coffee.　Coffee and soccer ball and crayon and so on. They are cheaper.

【図６　オンラインでＡＬＴとやり取りをした際の会話の一部】

(2)　今後の課題

①言語活動を行うときに、教師によるフィードバックはできていたが、生徒同士の相互評価によるフィードバックの場面に課題が見られた。今後は、生徒同士によるエラーチェックなど、互いに学び合える言語活動に取り組んでいきたい。

②図６から分かるように、対話を継続させることに対して一定の成果は見られたが，会話の流れに応じて関連する質問を即座に問いかけることに課題があることが分かった。今後は，生徒の質問力を育てていきたい。

第５分科会

パフォーマンス評価を生かした
コミュニケーション活動の工夫

授業公開　　水戸市立赤塚中学校

提　　案　　川崎市立井田中学校

葛飾区立立石中学校

神栖市立神栖第一中学校

霞ヶ浦帆引船

第５分科会

パフォーマンス評価を活かしたコミュニケーション活動の工夫

～　ルーブリックを活用した相互評価・自己評価の工夫を通して　～

茨城県水戸市立赤塚中学校　教諭　綿引　昌子

１　研究の方針

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）第１章総則には、「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。」とある。また、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（令和２年　国立教育政策研究所）には、「指導と評価の一体化を図るためには、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。」とある。

そこで本校では、評価という視点から、学習計画や生徒が取り組む活動について見直すことにした。評価を行うことが最終目的にならず、評価を活用することでより効果的な学習ができるように留意した。

２　研究の内容

(1)　教師が行う評価

①パフォーマンステストの設定

本校では、授業の中でスピーキングテストとライティングテストを実施している。スピーキングテストには、AET とのやり取りと、プレゼンテーションやスピーチの発表が含まれ、その場で直接パフォーマンスを評価する場合と、録画した動画を見て評価する場合がある。ライティングテストは学期に２回程設定をしている。スピーキングでもライティングでも、パフォーマンステストにおいては、事前指導が重要であり、スケジュールやルーブリックを生徒と共有して見通しをもたせることや、単元の途中でフィードバックを与え、改善する時間を取ることに気を付けて指導を行ってきた。

②ルーブリックの活用

パフォーマンステストに向けて見通しをもった活動ができるよう、生徒とルーブリックを共有することは重要である。ルーブリックを通して、教師が指導するポイントと、生徒が目指すべき姿を焦点化できるようにし、パフォーマンス評価を効果的に活用しながら、生徒の資質・能力を育成できるよう指導に取り組んできた。達成状況が可視化されるので、生徒は「できた」という自信をもって活動やテストに臨むことができるようになった。

ルーブリックを作成する際は、単元目標と評価規準の内容が一致しているか、生徒が理解しやすい言葉で書かれているかといった点に留意するとともに、あらかじめ条件を設定することで、評価基準が簡潔な表現となるように努めた。

生徒用（1回目は○，2回目は◎でチェックをする。）

条件１：日本らしいおみやげを選んでいる。
条件２：アレックスさんが理解できるように，おみやげの特徴（どんな時に使われるか，どんな歴史があるかなど）について説明している。

	発表の正確さについて（知識・技能）	発表内容の適切さについて（思考・判断・表現）	発表への取り組み方について（主体的に学習に取り組む態度）
A	まちがいのない文で，正しく伝えることができる。	おみやげを選んだ理由を説明しながら，２つの条件を満たして話している。	おみやげを選んだ理由を説明しながら，２つの条件を満たして話そうとしている。
B	少しまちがいはあるが，だいたいの内容を伝えることができる。	２つの条件を満たして話している。	２つの条件を満たして話そうとしている。
C	上記以外	上記以外	上記以外

(2)　生徒が行う評価

①相互評価と活動の工夫

本校では、生徒の相互評価を重視し、プレゼンテーションやスピーチの発表をする際には、必ず実施することにした。聞き手となる生徒は、ルーブリックを使って発表内容や話し方について評価をし、ワークシートやタブレットを活用して話し手に伝えた。話し手は、評価を見て発表の改善をすることができ、聞き手は、評価をする立場になることで評価基準を改めて確認することができた。また、発表に対する評価や質問を英語でやり取りする時間を設けることにより、コミュニケーション活動の場を創出できるように工夫した。日常会話とは違い、英語で伝えることは簡単ではなかったようだが、お互いに発表をよりよいものにするという目的のもと、一生懸命に取り組む様子が見られた。

Small Talk においては、グループになってセンテンスカウントを行った。３人組を作り、２人の会話を１人が聞くようにし、２人が話した文の数を聞き手がワークシートに記録するようにした。話し手は、たくさん話したいという気持ちをもつようになり、聞き手は、友達の会話を聞くことで新たな表現を獲得する機会をもつことができた。また、中間指導で確認した語彙や表現をワークシートに書きため、繰り返し活用していくことも表現や内容の幅を広げることにつながった。

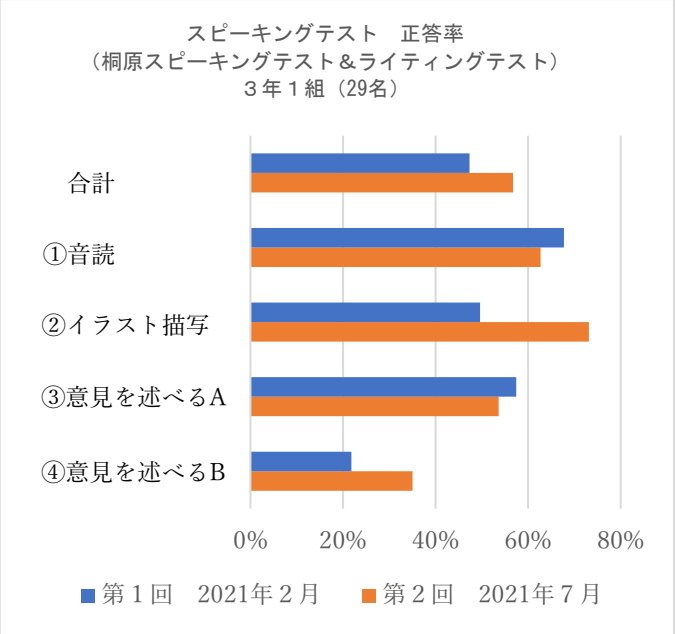
②自己評価と活動の工夫

評価の観点の一つに「主体的に学習に取り組む態度」があり、生徒の自己評価の重要性が高まっている。自己評価の難しさは、自分をどのくらい客観的に見られるかにあるが、話す活動においては、ICT 機器を活用することが効果的だと感じた。スピーチ発表の単元では、決められた時間の中で何度でも撮影できることにしたので、動画とルーブリックを見比べながら自己評価を行い、繰り返し挑戦する様子が見られた。自分を客観視することで得られた気付きこそが、生徒をより主体的な学習に向かわせるのではないかと考える。

３　研究の成果と課題

オンラインで受検できる外部テスト（桐原スピーキング＆ライティングテスト）を実施し、2021 年２月と 2021 年７月の結果を比較した。スピーキングテストの合計正答率は、47.3%から 56.7%と増加し、全体的に力の伸びが見られた。パフォーマンス評価を活用しながら、Small Talk やプレゼンテーション等のスピーキング活動に注力をして指導を継続してきた成果であるといえる。

一方で、評価を伝えるためにやり取りをする活動において、難しさを感じている生徒もいた。相手の話を聞いて意見を考える、それを英語で伝える、また、聞き手もそれを理解するなど、様々な力が求められる場面であった。今後の課題とし、指導の計画を見直していく。



第５分科会

話すこと［発表］のパフォーマンステストに向けたメモなどを活用する指導の工夫

神奈川県川崎市立井田中学校　教諭　井上 百代

１　研究の方針

学習指導要領の改訂に伴い、話すことの領域は、「話すこと［やり取り］」と「話すこと［発表］」に分けられた。「話すこと［発表］」には、次のアイウの３つの目標が設定されている。

ア 関心のある事柄について，簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。
イ 日常的な話題について，事実や自分の考え、気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。
ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて，考えたことや感じたこと，その理由などを，簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編」において、アで注目したいのは、「事前に原稿を書いてそれを暗唱したりするのではなく、興味・関心のある事柄であれば、既習の知識や技能を生かしてその場で話せるようにする必要がある」と示されていることである。

また、イでは、内容において「話し手として伝えたい順番や聞き手に分かりやすい展開や構成を考えて、それらをメモにするなどして整理し」とあり、「具体的には、ブレインストーミングで構想を膨らませた後に、スピーチの概要や大筋を箇条書きにしたり、展開を図式化するなどして整理する時間をとったりすることなどが考えられる」と述べられている。

さらに、ウでは、「キーワードを書いたり、書いたキーワードや語句を枠や矢印を用いて図にしてつないだりするなどのメモの取り方についても指導することが大切である。（中略）目的に応じたメモとなるように、一度発表した後で、メモを修正したり生徒同士でメモを共有したりする工夫も考えられる」とある。（下線部は筆者）

改訂された学習指導要領を読み取ると、多くの教室での問題点は「話すこと［発表］」の場面で原稿の丸暗記が多く、本来目指すべき「話す力」の育成に向けて、指導手順が適切でないことにあると考える。「話すこと［発表］」の目標に沿った指導および評価ができているか、目標を達成するためにどのような指導の手順をとればよいのかを見直すことが求められている。

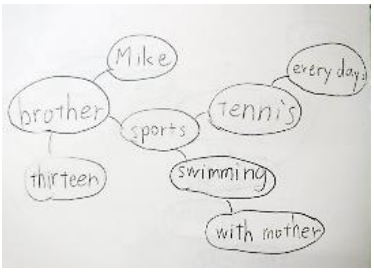
そこで、事前に書いた原稿をもとに発表に臨むのではなく、メモなどをもとに「話すこと［発表］」へとつなげるコミュニケーション活動に取り組むことで、学習指導要領が目指す「話す力」を育成することができるのではないかと考えた。

２　研究の内容

（１）１学年の指導

①メモの取り方

発表指導の当初から、マッピングを利用したメモの取り方を指導してきた。他己紹介の単元では、教科書本文を読み、理解した内容をマッピングさせ、さらに本文情報のマッピングに加えて、「もし自分が登場人物なら…」と想像して、オリジナルの内容を付け足すように指導した。最後は、そのマッピングを使いながら、リテリングを行った。



↑教科書内容をもとに作成したマッピング

②パフォーマンステスト（他己紹介プレゼンテーション）

右のルーブリックを採点の基準として、複数単元を通したパフォーマンステストを行った。事前に原稿は書かずに、伝えたいことをマッピングで整理するように指導した。

課題：聞き手が「へ～そうなんだ！」と思わず言ってしまうように、あなたがクラスメイトに知ってほしい人について紹介しよう。

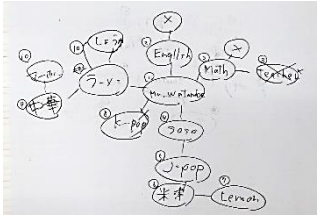
条件１　クラスメイトがあまり知らない情報を加えて話している。
条件２　質問をするなど、聞き手を意識した参画型のプレゼンテーションをしている。
条件３　アイコンタクトや表情など聞き手を引き込む工夫をしている。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	誤りのない正しい英文で話すことができる。	３つの条件を満たしてプレゼンテーションをしている。	３つの条件を満たしてプレゼンテーションをしようとしている。
b	誤りが一部あるが、コミュニケーションに支障のない程度の英文を用いて話すことができる。	２つの条件を満たしてプレゼンテーションをしている。	２つの条件を満たして伝えようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

（２）２学年の指導

①メモの取り方（Interview Mapping）

やり取りの指導においても、マッピングを活用した。トピックに沿って相手との対話を深めるために、マッピングのバルーンと線や矢印を使い、その場でメモをとるよう指導した。最後は内容のつながりをもたせながら、まとまりのある簡単なスピーチを行った。



インタビューしながら作成したマッピング→

②パフォーマンステスト（町紹介プレゼンテーション）

以下のルーブリックを採点の基準として、複数単元を通したパフォーマンステストを行った。Google スライドを使って発表することとし、メモの取り方はこちらから指定しなかった。生徒はスライドのイラストやキーワードをメモ代わりにしながら、発表に挑んだ。

課題：外国から交換留学生がやってきます。留学生がどんな興味関心をもっているかを想像し、「〇〇好きな人」に対して川崎市のオススメお出かけプランを提案しよう。

条件１：顧客のニーズに合わせて、旅行を計画している。
条件２：魅力やポイントについて、自分の考えや意見を理由とともに伝えている。
条件３：相手にとって分かりやすいように、プレゼンテーションの構成や伝える順番を工夫している。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	誤りのない正しい英文で話すことができる。	「川崎に行ってみたい！」と思ってもらえるように魅力を具体的に伝えたり、相手の興味をひいたりしながら、３つの条件を満たしてプレゼンテーションをしている。	「川崎に行ってみたい！」と思ってもらえるように魅力を具体的に伝えたり、相手の興味をひいたりしながら、３つの条件を満たしてプレゼンテーションをしようとしている。
b	誤りが一部あるが、コミュニケーションに支障のない程度の英文を用いて話すことができる。	３つの条件を満たしてプレゼンテーションをしている。	３つの条件を満たしてプレゼンテーションをしようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

↑生徒は作成した Google スライドで流れを確認しながら発表を行った

３　研究の成果と課題

（１）研究の成果

メモなどをもとに発表することを継続的に行ってきたことにより、原稿を丸暗記するのではなく、自分の言葉で、伝えたいメッセージを相手へ届けようとする生徒の姿が見られるようになった。さらに、中間発表の場を設定し、相手の発表を聞いて、わからないところがあれば伝えるよう声かけを続けた。すると、ネット翻訳などで難しい表現をそのまま使っていた生徒が減っていった。「何て言いたいの？」と、クラスメイト同士で言い換えの表現を共に考える姿も見られた。生徒同士のフィードバックを通して、伝えたいメッセージを大切にした発表になっていった。

原稿を使わずにスピーチやプレゼンテーションを行うことの最大の目的は、「聞き手へメッセージを届けようとしているかどうか」であることを改めて感じた。

（２）今後の課題

メモのみで発表する場合、英語表現の正確性に欠けたり、発表内容が乏しくなったりしてしまうことがある。事前に教師のチェックを受けた原稿であれば、正確な英語表現を使うことになる。しかし、それは本来目指すべき「話す力」の育成につながっていないことを教師は認識する必要がある。正確性を高める指導として、発表後にライティング活動を位置付けることが有効だと考える。

発表内容を豊かにするためには、中間発表の場を効果的に活用し、生徒へのフィードバックをより充実させていくことが重要となるだろう。

第５分科会

パフォーマンス評価を伝え合う力の育成に結びつける指導

～相手とのやり取りを深化させるために必要な要素の段階的指導の工夫～

東京都葛飾区立立石中学校　主幹教諭　河野　光志

１　研究の方針

現在、単元・授業ごとに生徒に「目標」を提示し、その単元・授業を通して到達すべきゴールを意識させることが一般的になってきている。「CAN-DO リスト」に基づき、３年間の学習到達目標を設定し、１年間で単元ごとに具体的に何ができるようになればよいのかを年間指導計画として作成している。ここで大切になってくるのが、生徒が学習到達目標に向かって一歩ずつ前進していることを意識しながら学習できているかということである。指導者にとっても生徒にとっても学習到達度を客観的に確認しやすい方法として、パフォーマンステストにおけるルーブリック評価が挙げられる。評価項目と「CAN-DO リスト」に基づいた学習到達度とを連動させることによって、評価項目を学習到達度を測る客観的指標とすることができる。そこで、生徒に振り返りをさせながらスモールステップを踏ませていく指導と評価の一体化を目指し、パフォーマンステストの評価を活用した伝え合う力の育成について研究することとした。

２　研究の内容

(1)　学習到達目標の設定（３年間の学習到達目標→各学年の学習到達目標→単元の学習到達目標）

領域ごとに３年間の学習到達目標を設定し、そのためには各学年においてどの段階まで到達すればよいかを「CAN-DO リスト」形式でそれぞれ設定する。そこから、単元ごとの学習到達目標、いくつかの単元を統合した学習到達目標を設定し、それぞれの段階で領域ごとの目標をどの程度達成できていればよいかを示した評価基準を基に数値目標として生徒に提示する。

まず３年次の目指す生徒像を目標として設定し、次に各学年でどの段階まで到達していればよいかを逆算して目標を設定していく。

(2)　学習到達度確認および振り返り

①学習到達目標の意識付け

「Study Guide」と名付けた学習振り返りシートを活用し、生徒と学習到達目標を共有する。いくつかの単元を統合した学習到達目標を「ステージゴール」、単元ごとの学習到達目標を「単元ゴール」、各単元内のセクションごとの学習到達目標を「スモールゴール」と名付け、学習の進行とともに生徒に提示し、「Study Guide」内に記入させていく。

②学習が進んだそれぞれの段階で振り返りをさせ、学習到達度の確認および今後の学習に向けた個人の課題等を意識させ、学習改善を図るための自己調整について考えさせる。

③パフォーマンステストごとに振り返りをさせ、自己調整を図るきっかけにさせる。パフォーマンステストに向けて、生徒自身の努力の何が効果的だったのか、何が足りなかったかを考えさせ、日々の授業への取り組み姿勢を改善させることをねらいとして行う。

④学期ごとに領域別の振り返りをさせ、次学期に自己調整を図るきっかけにさせる。領域ごとに振り返りをさせることで、生徒自身の具体的な弱点に気付かせ、課題解決に向けた授業に臨む姿勢や家庭学習の改善を促すことをねらいとして行う。この学期ごとの振り返りシートは、次の学期初めに見返しながら、領域ごとに具体的な努力目標を考えさせ、振り返りをしただけで終わらないよう、継続的な学習への自己調整を促すきっかけとして活用する。

(3)　パフォーマンステストのゴール（ルーブリック評価）から逆算した指導

パフォーマンステストでは、各学年の学習到達目標につながるようにルーブリック評価を作成する。

このルーブリック評価の項目をクリアするために、日々の授業ではスモールステップを踏ませながら段階的に指導していく。

①ある程度まとまった量を発話させるための指導

Ⅰプラス１の指導（感想・意見・具体例等を１文付け足す）。

言語材料を導入した際や質問に答える際は、発言に１文足して発話させるようにする。１年次から感想や意見を言うための「It's 形容詞」「I think」の形や、１年次に多くみられる「I like」の連発を脱却させるための「My favorite _____ is」や「I'm a _____ fan.」といった、どのような発言にも付け足しやすい表現を習慣化させていく。使わせたい表現を黒板に貼り、生徒に意識的に使わせるようにし、定着してきたら徐々に新しい表現を追加していく。言語活動においても、「プラス１で言ってみよう」から「３文で説明しなさい」や「５文程度で書きなさい」など徐々に負荷を高めた指示を出していく。

Ⅱあるテーマや質問に対して１分間モノローグで話し続けさせる。

プラス１のための表現を１つずつ積み重ねていくと、１年の後半には１分間モノローグに挑戦し、１分間で１０語以上は話せるような段階に到達する。１分間モノローグに取り組んだ後は話したことをそのまま書かせて、知識の整理や言いたかったけど言えなかった表現などを調べさせながら語彙の増強も図っていく。

Ⅲあるテーマや質問に対して簡単なメモを取らせてから話させる。

話したい内容を短時間で整理させ、論理的に順序立てて説明する力を鍛えるためにはメモの活用が有効である。話したい内容のキーワードだけを思いつくままに書き足しつなげていくマッピングの手法を使わせると、枝がつながっていることにより、１文１文がより具体的でつながりのある内容になる。

②相手とのやり取りを継続させるための指導

Ⅰ相手の発話に相づちを打たせる。

使う頻度の高い相づちを一覧表にして生徒に渡し、言語活動を行うたびに活動目的に適する相づちを３つ選び、その日の「ターゲットリアクション」と呼んで、練習させていく。

Ⅱ相手の発話に関する質問をさせる。

４人組で１人に対して３人が次々と自由に質問し、答えに対して相づちを打つという練習を定期的に行う。しかし、この練習は文脈がなく、実際のコミュニケーションとは言えないので、次の段階では相手の発話に応じて適切な質問をする練習をさせる。例えば、「先週自分がやったこと」といったテーマを与え、「発言→発言内容に関する質問→答え」という相手の発言に応じた質問をさせるペアワークを行っている。こういった活動をすることで、１分間モノローグを行った際に、徐々に相手の発言内容に関する質問をする力がついていく。

３　研究の成果と課題

(1)　成果

「話すこと［やり取り］」の言語活動の質が上がった。生徒にとってゴールが明確になり、自身の課題も明らかになることで、常に課題意識をもって言語活動に取り組めるようになった。また、生徒の振り返りから、課題克服のための学習への自己調整もより具体的に行えるようになったことがわかった。授業者側の指導も同様に、学習到達目標に向かってスモールステップを踏ませる一貫したものとなった。

(2)　課題

振り返り内容や頻度を精査する必要がある。振り返りをさせる回数が多いため、毎回同じようなことを簡単に書いて終わってしまい、振り返りをする意味がなくなってしまっている生徒がいる。今後はどのタイミングでどの程度の振り返りをさせるべきか精査する必要がある。どうやったら生徒に振り返ったこと意識させ、どのような場面で生かせるのかをフィードバックしながら、振り返りを有意義なものにしていきたい。

第５分科会

パフォーマンス評価を活かしたコミュニケーション活動の工夫

～　バックワードデザインによる単元計画を通して　～

茨城県神栖市立神栖第一中学校　教諭　荒原　聡

１　研究の方針

中学校学習指導要領（平成 29 年７月文部科学省）第２章各教科第９節外国語３指導計画の作成と内容の取扱い(1)指導計画作成上の配慮事項アには、「単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際，具体的な課題等を設定し，生徒が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら，コミュニケーションの目的や場面，状況などを意識して活動を行い，英語の音声や語彙，表現，文法の知識を五つの領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること。」と示されている。生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向け、達成すべき目標を明確にした単元計画の作成や、コミュニケーションを使う目的や場面、状況を設定した活動を取り入れた授業が求められている。

本学年の生徒（令和２年度３学年 計 90 名）は、実直で何事にも粘り強く取り組む反面、受動的な態度が見られる。また、神栖市内小中学生を対象に行われているスコア型４技能検定 GTEC において、特に話す力に課題が見られた。（スコア 87.9、CEFR-J A1.1、令和２年 10 月実施）以上のことから、生徒の主体性を育み、話す力を効果的かつ計画的に育成したいと考えた。

ルーブリック表を活用したパフォーマンス評価を行うことは、学習内容が観点別に身に付いているかを見取ること、学習者の英語学習における気付きを促すことに対して有効であると考えられる。バックワードデザイン（逆向き設計）の単元計画の終末にパフォーマンステストを設定し、生徒に学習への具体的な見通しやイメージをもたせることにより、英語を話す力が向上し、「主体的・対話的で深い学び」を実現できると考え、本主題を設定した。

２　研究の内容

(1)　研究の仮説

バックワードデザインによる単元計画において、目的や場面、状況などを意識したコミュニケーション活動の工夫をすることができれば、単元終末のパフォーマンステストに向け生徒が主体的に学習に取り組むことができるであろう。

(2)　研究の内容

①パフォーマンステストの実施

単元（SUNSHINE ENGLISH COURSE Program 8 Clean Energy Sources）の終末に ALT と１対１でのパフォーマンステスト（ゴール）を設定した。卒業を目前にひかえ、お世話になった人々やものへ感謝を伝えたり、今後自分に何ができるかを考えて話したりすることを単元の目標とした。生徒の生活に結びついた題材にしたことで、言語活動の目的や場面、状況などが明確になった。生徒は事前にウェビングマップを作成し、自分の考えをある程度まとめてからテストに臨むことができた。パフォーマンステストでは、予め用意していた英語を話す力だけでなく、生徒が話した内容に関し

Performance Test (Program8)　Evaluation Sheet

Class　No.　Name

	“身のまわりの人のためにできること”について			ALT とのやりとり		合計
	① Accuracy（正確さ）	② Expression（表現力）	③ Attitude（全般的な態度）	④ Accuracy（正確さ）	⑤ Expression（表現力）	
	／3	／3	／3	／3	／3	/15
A	適切な表現や文法を用いて伝えたい内容を正確に話している。	身のまわりの人々やもののために自分ができることについて，具体物を使用しながら理由とともに述べている。	身のまわりの人々やもののために自分ができることについて，具体物を使用しながら理由とともに述べようとしている。	質問されたことに対して，正しい英語で答えている。	質問されたことに対して，内容に応じた適切な理由を踏まえて答えている。	
B	表現や文法に少し誤りがあるが，伝えたい内容を話している。	身のまわりの人々やもののために自分ができることについて具体物を使用しながら述べている。	身のまわりの人々やもののために自分ができることについて具体物を使用しながら述べようとしている。	質問されたことに対して，答えているが，単語だけで答えていたり，文法的な誤りがあったりする。	質問されたことに対して，内容に少し誤りはあるが，答えている。	
C	使える表現や文法が限定的で内容が伝わりにくい。	身のまわりの人々やもののために自分ができることについて述べていない。	身のまわりの人々やもののために自分ができることについて具体物を使用しながら述べようとしていない。	質問されたことに対して，英語で答えていない，または，黙ったままでいる。	質問されたことに対して，適切に答えていない。	

表１　パフォーマンステストのルーブリック評価シート

て ALT からの質問に答える場面を設定し、即興で話す力も評価した。評価は、A～C の観点が具体的に示されたルーブリック表（**表１**）を、単元の初めに生徒に提示し、単元の最後にどのようなことができるようになればよいかを生徒が自ら考え自発的に学習できるようにした。また教師は、そのゴールに向けて単元を通して計画的に授業を進める必要があるため、単発的な授業ではなく内容的につながりのある授業を実践しようと心掛けるようになった。

②バックワードデザインによる単元計画（**表２**）

パフォーマンステストに向けて、話す力を計画的かつ着実に身に付けさせるために、単元をバックワードデザインで考え授業を構成した。単元の初めに、教師自身が「モデル」となったパフォーマンステストの動画や、前年に先輩が行ったパフォーマンステストの映像を見せて、ゴールを意識して学習活動に取り組めるようにした。また学習内容は、単元目標のサブテーマとして「人にやさしくプロジェクト」と掲げているので、「身のまわりにある人にやさしいもの」として、ユニバーサルデザインや世の中にある便利なものに関して自分の考えや気持ちを話す活動を行った。単元計画全体を通して、生徒がコミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定し、最終的に身のまわりの人やものへ感謝の気持ちをもてるような「つながり」を意識して学習に励める工夫をした。

Program 8 Clean Energy Sources

class(　　) name(　　)

単元課題 GOAL	中学3年生として身のまわりの人のためにできることを考えよう ～ 人にやさしくプロジェクト in English ～ 学習内容（Can Do）	自己評価
1st	This is something which…クイズを考えることができる	
	① 関係代名詞 which（目的格）を用いた文の作り方を理解することができた。	A B C D
	② グループでの Quiz 大会に積極的に参加することができた。	A B C D
	(Evaluation)	
2nd	大介とバットの会話から，発電に関しての情報を理解することができる	
	① 教 p.74～75 の新出単語の意味や発音について理解することができた。	A B C D
	② 本文の内容理解を通して，その他の音読方法について理解することができた。	A B C D
	(Evaluation)	
3rd	世の中にある便利なものについて，どんなものがあるか活動を通して知ることができる	
	① 関係代名詞 that（目的格）を用いた文の作り方を理解することができた。	A B C D
	② 世の中にある便利なものについて紹介する文を書くことができた。	A B C D
	(Evaluation)	
4th	大介の発表から，発電に関しての情報をさらに理解することができる	
	① 教 p.76～77 の新出単語の意味や発音について理解することができた。	A B C D
	② 本文の内容理解を通して，音読方法に関しての情報をさらに理解することができた。	A B C D
	(Evaluation)	
5th	日常において，どんなユニバーサルデザインがあるか知ることができる	
	① 関係代名詞 which/that（目的格）を活用して，会話活動に参加することができた。	A B C D
	② 便利だと思うユニバーサルデザインについて紹介する文を書くことができた。	A B C D
	(Evaluation)	
6th	自分の身のまわりの人々やものためにできることを，ウェビングマップを通して考えることができる	
	① ウェビングマップを通して自分の考えをまとめることができた。	A B C D
	② 次回に向けて，話すときの目線や抑揚などを意識して練習することができた。	A B C D
	(Evaluation)	
7th	自分の身のまわりの人々やものへ自分ができることは何かを考え，ALT に伝えることができる	
	① 適切な表現や文法を用いて，具体物を使用しながら理由とともに述べることができた。	A B C D
	② これまでの活動を振り返って，今後の学習への意欲を表わすことができた。	A B C D
	(Evaluation)	

表２　単元計画表

③コミュニケーション活動の工夫

即興で話すための手立ての一つとして、３人グループでの Small Talk を行った。話し手が１人に対して聞き手が２人という状況を設定し、相づちや聞き返しなど聞き手側同士がその場で考えサポートすることで、コミュニケーションを円滑にすることができた。また、文法導入の際のパターンプラクティスでは、ペアでイラストや写真を見ている人が見ていない人にイラストや絵の内容を説明するというような、Picture Describing の活動を継続して行った。また、第５時では、よく目にするユニバーサルデザインが、どのように人々の役に立っていて、自分はそれらについてどう考えるかを伝え合う活動を行った。毎時間、生徒同士で行った協働的な学びは、互いを高め合うことにつながった。

３　研究の成果と課題

(1)　研究の成果

昨年 12 月と本年２月に実施したパフォーマンステストの比較をした結果（**図１**）、B、C 評価の生徒は減り、A 評価の生徒が９名増えた。生徒の学習への動機付けがなされ、主体的に学習に取り組むことができた結果と考えられる。振り返りシートでは、「思ったことを話すことができたが、内容をもっと深めたい。」「聞かれたことに答えることはできた。次回は、理由をつけて話すなどもっと工夫したい」というように、自分の話す力を客観的に分析し、次回のテストに前向きな意欲を示す記述が見られた。

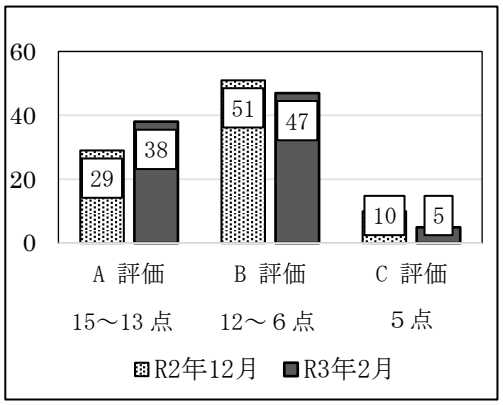


図１　パフォーマンステスト結果推移（人）

(2)　今後の課題

今後のパフォーマンステストでは、生徒同士のインタラクションにおいて即興で話すことや、初見の英文を読んで自分の意見を英語で書くといった技能統合型のテストなど、単元によって様々な形式で実施していきたい。更に、話す力を高めるために、即興で話すトレーニングを続け、Small Talk における中間指導の充実や英語の正確さに関する効果的な手立てを考え取り入れていきたい。

第45回 関東甲信地区中学校英語教育研究協議会 茨城大会 役員名簿

都県名	関ブロ役職	氏名	職名	学校名	所属校〒	所属校住所
群馬	大会副会長	吉崎 仁	校長	藤岡市立東中学校	375-0023	群藤岡市本郷786番地
群馬	理事	柳川 祥恵	教諭	群馬大学共同教育学部附属中学校	371-0052	前橋市上沖町612番地
栃木	大会副会長	小川 浩	校長	宇都宮市立雀宮中学校	321-0132	宇都宮市雀の宮7丁目28-16
栃木	理事	佐藤 昭	教諭	宇都宮市立雀宮中学校	321-0132	宇都宮市雀の宮7丁目28-16
山梨	理事	石井 敬	校長	甲府市立南西中学校	400-0041	甲府市上石田4丁目10-8
山梨	理事	市瀬 俊	教諭	市川三郷町立市川中学校	409-3601	西八代郡市川三郷町市川大門5064-1
千葉	理事	中島 尚史	校長	千葉市立高浜中学校	261-0003	千葉市美浜区高浜4-8-1
千葉	理事	宮野 友輔	教諭	千葉市立朝日ケ丘中学校	262-0019	千葉市花見川区朝日ケ丘2-4-1
神奈川	理事	塚田 和順	校長	横須賀市立衣笠中学校	238-0032	横須賀市平作2-31-1
神奈川	理事	北 理津子	総括教諭	鎌倉市立手広中学校	248-0036	鎌倉市手広5-7-1
長野	理事	臼井 伸明	校長	麻績村立筑北中学校	399-7701	東筑摩郡麻績村麻4631
長野	理事	山田 崇史	教諭	長野市立川中島中学校	381-2226	長野市川中島町今井1360
埼玉	理事	青野 保	校長	蓮田市立黒浜西中学校	349-0101	蓮田市大字黒浜3862
埼玉	理事	髙橋 太一	教諭	埼玉大学教育学部附属中学校	336-0021	さいたま市南区別所4-2-5
東京	理事	刀根 武史	校長	武蔵野市立第五中学校	180-0014	武蔵野市関前2-10-20
東京	理事	板垣 繁	校長	葛飾区立金町中学校	125-0035	葛飾区南水元3-1-1
茨城	大会会長	森 久美子	校長	水戸市立稲荷第一小学校	311-1115	水戸市大串町142-1
茨城	大会事務局長	蓮見 宏明	教諭	水戸市立第四中学校	310-0836	水戸市元吉田町1987-3
茨城	理事	谷田部由実子	校長	日立市立平沢中学校	317-0066	日立市高鈴町1-15-1
茨城	理事	新井 淳子	校長	水戸市立飯富中学校	310-4206	水戸市飯富町4479-1
茨城	理事	宮内 芳孝	校長	鉾田市立鉾田南小学校	311-1515	鉾田市烟田1059-1
茨城	理事	福田 恭子	校長	古河市立三和中学校	306-0014	古河市東山田472
茨城	理事	本橋 和久	校長	牛久市立下根中学校	300-1203	牛久市下根町829

関東甲信地区中学校英語教育研究協議会会則

第１章　総　　則

第１条　本会は関東甲信地区中学校英語教育研究協議会と称する。

第２条　本会の事務所は会長指定の場所に置く。

第３条　本会の会員は関東甲信地区１都８県（茨城県，栃木県，群馬県，埼玉県，千葉県，東京都，神奈川県，山梨県，長野県）に所在する中学校の英語教育に関係する者で，理事会の承認した者とする。

第２章　目的及び事業

第４条　本会は英語教育に関係する事項を研究協議し，会員の資質の向上に努め，英語教育の振興を図ることを目的とする。

第５条　本会は前条の目的を達成するために，次の事業を行う。

１　研究大会の開催（講演会，研究会，授業研究協議会等）
２　研究調査
３　研究成果，資料等の作成刊行
４　研究調査等の情報交換
５　関係官庁への意見具申
６　語学研究機関との連絡
７　その他本会の目的達成に必要な事業

第３章　組　　織

第６条　第３条に規定する１都８県の中学校英語教育研究会をもって組織する。

第４章　役　　員

第７条　本会には次の役員をおく。

１　会　長　　１名
２　副会長　　２名
３　監　事　　２名
４　理　事　　若干名

第８条　役員の選出は次のとおりとする。

１　会長，副会長及び監事は理事会で選出する。
２　理事は第３条に規定する１都８県の中学校英語教育研究会毎に２名を原則とする。

第９条　役員の職務は次のとおりとする。

１　会長は本会を代表し，会務を統理し会議の議長となる。

２　副会長は会長を補佐し，会長事故あるときはその職務を代行する。

３　監事は会計を監査する。

４　理事は理事会を構成し，会務を審議する。

第 10 条　役員の任期は一か年とする。但し重任を妨げない。補充による役員の任期はその在任期間とする。役員は任期満了するとその後継者の就任するまではその職務を行わなければならない。

第 11 条　本会に顧問をおくことができる。顧問は理事会の推薦を経て会長が委嘱する。

第５章　会　　議

第 12 条　会議は役員会（会長・副会長），監事会及び理事会とする。会議は会長が召集し次の事項を行う。

１　役員会は本会の運営について協議し調整をはかる。

２　監事会は本会の会計について監査する。

３　理事会は本会の事業・会計等の報告及び案について審議する。

第６章　会　　計

第 13 条　本会の会費は分担金及び会費をもってこれに当てる。

第 14 条　本会の経費は会費及び補助金をもってこれに当てる。

第 15 条　本会の会計年度は毎年４月に始まり，翌年３月３１日に終わるものとする。

第７章　会則変更

第 16 条　本会の会則は理事会の議決によって改訂することができる。

附　　則

１　本会則は，昭和５２年４月１日より施行する。

２　本会則は，昭和６３年６月２１日一部改定する。

３　本会則は，平成２７年６月２６日より一部改定する。

慣例としての申し合わせ事項

１　役員の選出は当分の間次のとおり行う。

(1) 会　長　１　名　関東甲信地区中学校英語教育研究協議会研究大会開催都県の会長が当たる。

(2) 副会長　２　名　関東甲信地区中学校英語教育研究協議会研究大会次期及び次次期開催都県の会長が当たる。

(3) 監　事　２　名　関東甲信地区中学校英語教育研究協議会研究大会次期及び次次期開催都県から各１名を推薦する。

(4) 理　事　若干名　各都県中英研の会長及び事務局長の各２名を原則とする。

協賛団体・企業一覧

東京書籍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６０

開隆堂出版株式会社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１

教育出版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６２

光村図書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６３

三省堂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６４

公益財団法人　日本英語検定協会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５

祝 第45回関東甲信越地区英語教育研究協議会茨城大会

デジタル教科書は新しい時代へ

学習者用デジタル教科書

NEW HORIZON
English Course

東京書籍
令和3年度
中学校

全ての生徒に
学ぶよろこびを

授業に新たな
引き出しを

ポイント1 複数の書目を一括管理

複数の教科や教材を1つのビューアで管理できるため，
操作が簡単で，振り返りや教科横断的な学習に便利です。

ポイント2 学習を支える便利な機能

- **拡大** …… 見たいところを自由に拡大できる！
- **書き込み機能** …… 自分だけの学習の記録を残すことができる！
- **外部リンク機能** …… 参考資料（Webページ）へのリンクを自由に貼ることができる！

ポイント3 特別支援への対応

文字の大きさ変更（リフロー表示），文字色・背景色・行間の変更，ふりがな表示，分かち書き表示に対応しています。

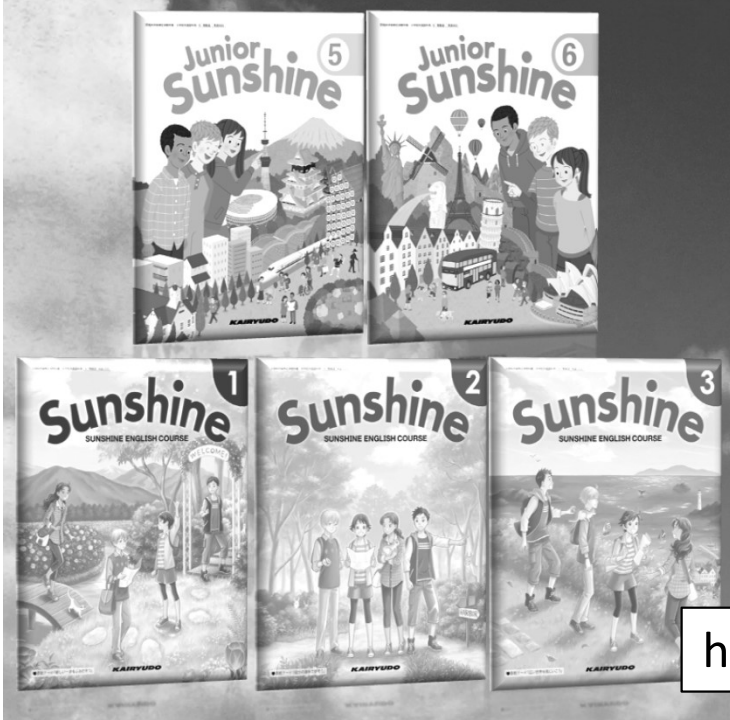
ポイント4 Dマークコンテンツとの一体的な使用

紙面上のDマークや2次元コードをクリックするだけで，教科書と連携するデジタルコンテンツ（Dマークコンテンツ）を表示できます。

Click

東京書籍の「学習者用デジタル教科書」は株式会社 Lentrance より提供される
「Lentrance Reader」にてご利用いただく教材です。

東京書籍
教育事業本部 営業部（東京）〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7577 Fax:03-5390-7582
（大阪）〒532-0004 大阪市淀川区西宮原1-4-10 Tel:06-6397-1351 Fax:06-6397-1357
関東支社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7467 Fax:03-5390-6017
ホームページ https://www.tokyo-shoseki.co.jp 東書Eネット https://ten.tokyo-shoseki.co.jp



教科書
完全準拠

指導用教材

https://www.kairyudo.co.jp/index.htm

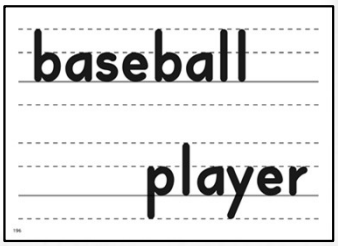
小学校

商品の詳細や価格は
URL、QRコードから

中学校

単語絵カード

5年
6年



KAIRYUDO
開隆堂出版株式会社
◎発行物のご案内はホームページでご覧ください。
www.kairyudo.co.jp/
本　社　〒113-8608　東京都文京区向丘 1-13-1
TEL 03-5684-6111／FAX 03-5684-6133

祝 第45回関東甲信地区英語教育研究協議会
茨城大会

教育出版は，無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し，子どもたちの成長に貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を，家庭へ，地域へ，さらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自ら問い，考え続け，行動し，社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。そのような，次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版

教育出版ホームページ　https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/

〒135-0063東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館　●TEL 03-5579-6546　●FAX 03-5579-6548

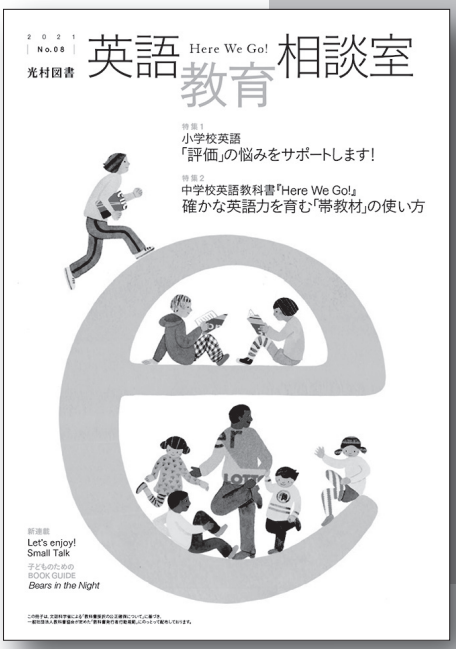
光村図書 ウェブサイトのご案内

先生の授業をサポートする 豊富なコンテンツを 多数ご用意しています。

中学校
英語　デジタル教科書 & デジタル教材

令和３年度版教科書準拠
学習者用・指導者用

体験版を
お試しいただけます。



英語 Here We Go ! 教育 相談室
８号

特集　小学校「評価」
中学校「帯教材の使い方」

サポート資料のご案内もありますので,
評価にお悩みの際は
ぜひご活用ください。

光村図書

光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎 2-19-9
Tel 03-3493-2111（代表）／ Fax 03-3493-2177
www.mitsumura-tosho.co.jp

三省堂　指導者用・学習者用デジタル教科書（教材）のご案内

三省堂は「ことまな」でGIGAスクール構想の推進を強力にサポートします！

令和3年度版 NEW CROWN English Series ❶❷❸

指導者用 デジタル教科書（教材）

充実のコンテンツとスムーズな操作感で、テンポのよい授業展開と先生の創意工夫を強力にサポート！

学習者用 デジタル教科書＋収録音声付き

紙面と音声をタブレット端末で利用できるから、「1人1台端末」時代を強力にサポート！

◎ラインナップ

商品	ライセンス形式	対応OS	ライセンス期間	価格（税込）
指導者用デジタル教科書（教材）※各学年	学校内ライセンス	Windows 10/11 iPadOS 14 以降 Chrome OS	教科書刊行期間	各 88,000 円
			年間	各 26,400 円
学習者用デジタル教科書 ＋ 収録音声付き ※各学年	1 ユーザー 1 ライセンス		在学期間	各 880 円

【ご購入に際して】

◉本商品のライセンスには、アプリ版（Windows版／iPad版）双方のライセンスが附属します。
◉Chrome OSはWebブラウザ版のみのご提供となります。
◉Webブラウザ版対応ブラウザ
指導者用デジタル教科書（教材）：Windows端末　Google Chrome、Microsoft Edge（Chromiumベース）／Chromebook　Google Chrome
学習者用デジタル教科書＋収録音声付き：Windows端末　Google Chrome、Microsoft Edge（Chromiumベース）／Chromebook　Google Chrome／iPad　safari
◉指導者用デジタル教科書（教材）のみ、ご導入環境により、サーバ運用版（Windowsのみ対応）をご用意いたします。
◉指導者用デジタル教科書（教材）の 年間ライセンス 適用期間は、ご注文月の翌年月末までとなります。
◉本商品をご利用いただける期間は、令和3年度版中学校教科書の刊行期間（2025年3月31日予定）までとなります。

ことまなは、三省堂がご提供する教育ICTサービスのプラットフォームです。

体験版はコチラから

三省堂
三省堂教科書・教材サイト http://tb.sanseido.co.jp
TEL: 03-3230-9416 ／ E-mail:info-tbdt@sanseido-publ.co.jp

英検

後援：文部科学省

多くの大学の入学試験で英検の級・スコアが利用可能！

英検®は大学入試にも役立ちます

2021年度入試　英検活用大学の一例

近畿大学	法政大学	立教大学
千葉工業大学	東洋大学	龍谷大学
明治大学	立命館大学	東京理科大学
日本大学	関西大学	専修大学
早稲田大学	中央大学	ほか

一部の大学を抜粋し、2021年度大学入試において志願者数が多い順に掲載しています。

※掲載順（志望者の多い順）は、2021年私立大一般選抜の志願状況に関する（株）旺文社教育情報センターの調査による。
※英検を活用できる大学は、英検ウェブサイト内「英検・TEAP・IELTS 活用校検索」をご確認ください。
※入試に利用可能な英検実施方式や、必要な級・スコア、優遇される内容等の詳細は各大学の募集要綱等をご確認ください。

実用英語技能検定 2021年度 試験日程

最新の日程は英検ウェブサイトをご確認ください。

※個人申込の日程です。団体申込は別途申込期間と試験日の設定があります。
二次試験は一定の条件により、いずれかの試験日程を協会が指定します。
詳しくは、英検ウェブサイト（https://www.eiken.or.jp）をご確認ください。

従来型・個人申込

		第1回	第2回	第3回
一次試験		5月30日(日)	10月10日(日)	1月23日(日) 2022年
二次試験	A 1～3級	6月27日(日)	11月7日(日)	2月20日(日) 2022年
	B 2～3級	7月4日(日)	11月14日(日)	2月27日(日) 2022年
	C 1級・準1級	7月11日(日)	11月23日(火祝)	3月6日(日) 2022年
申込受付（個人申込）		3月25日～4月15日（書店は4月9日締切）	8月1日～8月27日（書店は8月20日締切）	11月1日～12月10日（書店は12月3日締切）

試験日程のご都合が合わない方 英検の受験機会を増やしたい方 こちらの試験がおススメです！

原則毎週土日（一部エリアは平日も）実施※・1日で4技能が測定できる英検

※級や地域により実施日は異なります

英検 S-CBT

後援：文部科学省

- ☑ 従来型の英検と同じ難易度、出題形式
- ☑ 一次試験と二次試験を1日で受験できる
- ☑ 取得した級、CSEスコアも従来型の英検と同様、生涯有効

詳しくは英検S-CBTウェブサイトをご覧ください。
https://www.eiken.or.jp/cs/s-cbt/ad/cs/2021.html

※英検®は公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

英検 公益財団法人 日本英語検定協会

※最新の情報は、英検ウェブサイトをご確認ください。

英検 検索